

---

# 大熊猫の日常は波乱万丈です。

羽遊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大熊猫の日々は波乱万丈です。

### 【Nコード】

N5931V

### 【作者名】

羽遊

### 【あらすじ】

町の片隅で出会ったのは、大熊猫に変化していた少女だった。

……で、その子に出会ってからというもの、俺の人生は非常識かつ非日常的なものへと変わっていったしまったのだった。

家に訪れるのは変な奴ばかり。幻獣を喚ぶ少年、亀の甲羅を背負った男、鳥に乗って空を飛ぶ美女……動物園か、ここは。

それに加え、元々家にいるやつらもおかしな奴ばかりだ。

ハーフっぽいブラコンな妹、甘えん坊なパンダの少女。暴れん坊なライオンの……

ってまだいたのかよ！

しかもこの動物関係のやつら、なんと「第二次動物大戦」などという奇妙な戦争の最中らしい。

……え？俺も？俺も巻き込まれてんの！？

うんまあ、つまらないよりはマシ……かな。

人間と動物が織り成す、ちょっと不思議系ラブコメディ。

……大熊猫の日々は、波乱万丈です。

## 俺の眼下は白黒です（前書き）

主要人物

フジタニ

・ 藤谷 鷹太郎

ヨウタロウ

・ パンダ？

## 俺の眼下は白黒です

ある日森の中で熊さんに会うのは恐ろしい。

だが、ある日町の片隅で熊猫さんに会うのもずいぶん恐ろしい話だろう。

熊猫。知つてのとおり、この漢字はパンダを表す。俺のイメージのパンダは、黒と白のコントラストがどーたらこーたらの生物で、かわいい。それぐらいのやつだ。

その生き物を動物園で傍観者として見る分にはいいのだけど……。

俺の眼下に存在するのは、白と黒のコントラストがどーたらこーたらの、かわいいやつ。

なあ、聞いてもいいか。この俺の目の前に倒れてる生物。  
パンダ……だよね？

一、玄関に大熊猫はキツイだろ（前書き）

主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎
- ・ パンダ？

## 一、玄関に大熊猫はキツイだろ

俺がパンダに出会ったのは昨日の夕方。

町と町を跨ぐように建つ俺の本拠地藤谷宅。その玄関の前に、どでかいパンダが倒れていたのだ。この大きさ。パンダはパンダでもジャイアントパンダほどの大きさがある。熊猫というより、大熊猫だ。

大した驚きも無く、はたまた無関心というわけでもなく、ただ思った事は、おい玄関の前に倒れてんじゃねえよドアが開かないだろうが、だった。

「……寝てるのか？」

俺はつま先でつつい、と太い脇腹をつついてみた。反応がない。ただのパンダのようだ。

死んでる？まさか。こんなところで屍にならないで下さい。

「おい、ドーキーよー」

今度はさつきより強めに脇腹をつついてみる。またまた反応なし。

……もしかして、マジで死んでるのか？

俺は心配になって、パンダの顔を覗き込む。目は閉じているが、口元をよく見ると呼吸はしているようだ。なんだ、寝ているだけだよ。

仕方なく俺はパンダの後ろ足を持って、引っ張ってみる。かなりの重量級だが、動かせないでもない。そのまま後ろへ引きずっていく。

と、そこで俺は恐ろしいものを目にした。パンダがもともといた場所に、どす黒い赤が広がっていたのだ。考えなくても分かる。これは血だ。

「おいおい、マジかよ……」

動物園から脱走する途中で、猟師にでもやられたのだろうか。そ

んな馬鹿な。というか、そもそもここらへんにパンダを飼っている動物園はないぞ。

混乱する頭を必死に抑えて、どうするべきか考える。こんな状況を動物保護団体にでも見られたら、大変な事になってしまう。とりあえず止血か。今から動物病院に連絡する手もあるが、それだと間に合わないかもしれない。

俺は包帯を取りに家の中へ飛び込んだ。

リビングへ入り、赤い十字マークの付いた白い救急箱を手に持って、再び玄関へと急ぐ。家にはまだ誰も帰ってきていない。やはり、自分でどうにかしないとイケないようだ。

外へ出て、パンダの元へ駆け寄る。救急箱を地面に置き、ひとまず重くて大きな巨体を両腕でひっくり返して、仰向けにさせる。

パンダの怪我は、思ったより悲惨なものだった。白い毛は土と血で汚れていて、腹には刃物で切られたような傷がいくつもあつた。

この出血量だと、時間はあまりなさそうだ。

俺は焦る心で救急箱を開け、包帯を取り出そうと手を伸ばす。

と、その瞬間。救急箱へと伸ばした俺の手が、黒くてぶつとい何かにつかまれた。

かすかな爪の感触。ふさふさとした漆黒の毛。そちらへ顔を向けると、なんとパンダがあぐらをかいて座っていた。

血の出ている傷の箇所をなんでもないので右手でさすりながら、つぶらな瞳でこちらを見上げてくる。

「あー……大丈夫？」

念のため聞いてみる。

「うん、らくしよーらくしよー」

そうかそうか。それは良かった。これで動物保護団体から……  
……空耳？今、喋ったよな？パンダ。空耳ですか？そうなんです



か？

疑うのなら、確かめるまでだ。

「一応、包帯巻いておこうか？」

俺はつかまれている方の手で包帯をとり、パンダに見せ付ける。

「やだよ。包帯嫌いなもの。ホットケーキ持ってきて。メープルシロップがどばどばのやつ。じゃなきゃ、この腕折るよ？」

パンダにつかまれている右腕に、かすかに力が込められる。いや

いや、勘弁してくれ。いろんな意味で。

一、玄関に大熊猫はキツイだろ（後書き）

こんにちは、羽遊です。

高校一年の鷹太郎が自分の家の玄関で出会ったパンダ。実はこのパンダ、とんでもない秘密を抱えています。では、それは次の回で。

二、ホットケーキはシロップどばどばで！（前書き）

主な登場人物

・フジタニ 藤谷 ヨウタロウ 鷹太郎

・パンダ？

## 二、ホットケーキはシロップどばどばで！

質問。なぜ俺は今、ホットケーキを焼いているのだろうか。

回答。理由は簡単。パンダにホットケーキを喰わせると脅迫されたからだ。

へえ、パンダって人語を理解するんだ……って、んなワケないだろ。なんであのパンダは人の言葉を話しているんだ？普通、話すとしても「動物語」やら「大熊猫語」とかあるだろ、パンダの話すべき言葉が。

「おっと、焦げちまう」

ホットケーキをひっくり返す。おし、なかなか良い出来栄えだ。

俺は白い皿にホットケーキを3枚移し、その上からメープルシロップを言われた通りどばどばとかける。

それを持って、玄関を出た先のパンダの元へ運ぶ。ナイフやフォークはいらないだろう。あんな細かい作業が苦手そうな手に、この代物を使えるとは到底思えない。

「ほら、お待たせ」

パンダのあぐらをかいている足の前に、皿を置いてやる。するとどうだろうか。パンダは不思議そうな眼差しでこちらを見上げてくる。なんだ、メープルシロップが足りなかったのか？

「ねえ、喧嘩売ってるの？」

「あ、悪い悪い。今持ってくるから」

予想的中、もっとシロップが必要だったらしい。お前はどこぞの黄色い熊さんか。いや、あの熊さんの大好物は蜂蜜だったか。

再び俺はメープルシロップを持ってパンダの元に帰還する。だが、なぜかパンダはまだ納得がいていない顔つきだった。というか、妙に人間じみた表情するなあ、お前は。

「これでも足りないなら、スーパーまで買いに行くしかないんだけど」

パンダの眼前でメープルシロップの入ったビンを振る。中身は半分以上残っているから、大丈夫だとは思うけど。

「は？何言ってるの？」

首を傾げるパンダ。

「パンダが言ってるのは、ホットケーキを食べるための物だよ？」  
かわいらしい女の子の声で、そう訴えてくる。

「お前、ナイフとフォーク使えんのか？」

パンダは胸をドンと叩き、

「当たり前でしょ！。パンダを誰だと思ってるの？」

「パンダだろ」

「うん、パンダ……今はパンダ？だけど、そつ、そこはボケようよ」  
いや、パンダだからナイフとフォークが使えないと思っただけ  
ど。

俺は仕方なくリビングへ引き返し、ナイフとフォークを持って外へ戻る。何度目だよ、これ。

「ほらよ」

ホットケーキの乗った皿の横にその二つを置いてやって、そこからはどんな風に食べるのか観察することにした。

「はい、いただきますーす」

パンダは目を輝かせながら、人間の様に胸の前で手を合わせ、頭を下げた。動物のくせに、随分と礼儀作法がしっかりと身についているな、こいつ。

それもそれで問題だったが、本当の問題はここからだった。

こいつ、俺が持ってきたナイフとフォークを完全に無視して、素手で食べやがった！

「うん、なかなか……でも、やっぱりお母さんのやつの方がおいしいなあ」

お前のお母さん、ホットケーキ作れんの？そりゃ大変。「天才親

子パンダ」そしてTVに引つ張りだこだな。

じゃなくて！

「ナイフとフォーク、必要ねえじゃんかよ！」

「え、なんで？」

質問の意味が分からない、といった様子でこちらを見つめるパンダ。

「ちゃんと使ってるよ？ここにあるだけで、なんか安心するの」

「お守りかよ。それは元々気休めの為に存在するものじゃないぞ」

「わ、分かってるもん……ただ、こんな手じゃ使えないでしょ」

シロップでべとべとになった手をこちらへ向けてくる。こら、触ろうとするな。

約2分後には、皿の上にあつたホットケーキは消失していた。と  
いうか、食べられていた。

早すぎだろ。あんな分厚くて食べ応えのあるものを三枚、こんな  
短時間で食べ終えるなんて。

「さすが、動く……っ……」

だが、感心と呆れの入り混じったその言葉を、俺は驚きで最後まで  
で言えなかった。

顔をあげてパンダの腹が目に入った。それはいいのだが。

いつのまにか、土と血で黒く汚れていた腹が、傷ひとつなく真っ  
白な毛に覆われたものになっていたのだ。

「お、おい、お前、腹の……」

声をかけると、気だるそうに可愛い顔をこちらへ向けてくる。

「今？お腹いっぱいだよ……」

「違う。お前、腹の傷はどうした？」

そう問うと、パンダは自分の腹を一瞥してから、

「ん？ホットケーキ食べて治ったけど？」

当たり前のようにそう言い放った。

「お前の怪我はホットケーキを食っただけ治るのか。便利すぎんだ

る」

俺はパンダを馬鹿にするように見下ろす。RPGの主人公じゃあるまいし。

「なっ、なにその顔！嘘じゃないもん！ほら、触ってみてよ」

自分の腹をぽんぽん叩き、「触ってみろ」と催促する。

疑うだけでは仕方が無いので、そつと手を伸ばして、パンダの腹に触れてみる。

……マジだ。本当に傷が消えてる。どんなトリックだよ。ホットケーキトリック？

「あう……そんなに撫で回さないでよ……」

パンダが腹触られたぐらいでなんで照れてんだよ。本当に人間じみている。

「にしても、ホットケーキ食べて傷が治るって。パンダも素晴らしい能力持っているんだな」

まだ信じきつてはいないが、一応賞賛しておく。

「正確には、パンダはパンダじゃないんだけどね」

……え？

さらつと今までの会話を流す言葉を言ったぞ、こいつ。

「いや、パンダだろ。あきらかパンダじゃん。どっからどう見てもパンダじゃん」

「じゃあ君の知ってるパンダって、人間の言葉話すの？」

「それは、話しているところはみたことないけど」

「じゃあ君の知ってるパンダって、こんなところを当たり前のように徘徊しているの？」

「……まあ、見た事ないけど」

「じゃあ君の知ってるパンダって、ホットケーキ食べてどんな傷でも治るの？」

「……そんなパンダがいたら、見てみたいよ……」

目の前にいるけど。

「それなら、お前は一体何者なんだよ。着ぐるみなのか、それ」

パンダは腕を組み、少々考える素振りを見せて、

「それを聞いちゃったら、君も巻き込むことになるけど……それで  
もいいの？」

と、質問返しをしてきた。巻き込む？巻きこむって、何に？

「別にいいけど。こんなところでパンダにホットケーキ作ってそれで  
終わりなんて、つまらないだろ」

「ほんとにいいの？」

もったいぶる様に再度問いかけてくるパンダ……じゃないのか？

「いいって。どんなことでもつまらないよりはましだ」

「ふうん……分かった。ありがとね」

その時だけは、パンダの笑顔が異様に見えてしまった。

なんだ、この不気味なオーラは。俺、踏み込んではいけない所に

……

「実はパンダね。人間なんだ！」

踏み込んでしまった、と。今更ながら気づいたのだった。  
遅えよ、俺。



ニ、ホットケーキはシロップどばどばで！（後書き）

### 三、朱色の娘と恐怖の妹（前書き）

主な登場人物

・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう

・ パンダの女の子 ふじたに みこ

・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ

### 三、朱色の娘と恐怖の妹

巨大なパンダの口から発せられた、驚くべき内容。

「……じゃあ、証拠でもあるのか？」

半ば信じていない俺の表情を大熊猫は読み取り、

「さつき、巻き込まれていい、って言ったし……うん。今から見せてあげる」

自信満々の笑みをこちらに向けた。

すると目の前であぐらをかいていたパンダはおもむろに立ち上がり、ピンと背伸びをするように姿勢を正す。そして、黒くてモサモサしている両手を空に向けて伸ばし、呼吸を整え、こう叫んだ。

「変化、解除！」

その瞬間。大熊猫が真つ黒な煙に包まれ、姿が見えなくなる。

「うつ……ごほっ、ごほっ……煙たい……」

煙の中から女の子の咳き込む声。解除した本人がダメージ受けてどうすんだ。

「大丈夫かー？」

ちよつと心配になったので声をかけてみる。すると、パンダのときより鮮明な女の子の声が返ってきた。

「うん、らくしよーらくしよー。では、とくにご覧あれ！」

その張り切った言葉と同時に、突風に吹かれたように黒い煙が飛び去っていき、あとには小柄な女の子のシルエットだけが残った。

……目の前にいるのは、紛れもなく人間だ。黒い煙が噴出している間に、この女の子とパンダが入れ替わったというイリュージョン説も無くは無いが、だとしたらあの煙は何処から出てきた、という話になる。

にしても、可愛いなあ、こいつ。大きくて少しツンとしている目に、整った鼻。そして桃色に潤った唇。その驚くまでに整った顔立

ちを優しくつつむ艶やかな黒髪は、肩の辺りまで伸ばしていた。そして、鮮やかな朱色の着物を羽織っているその様は、言葉にするならアイドル日本人形、といった感じた。

「そ、そこまでジロジロと見られると……。そんなに美しかった？」「美しいっていうか、可愛い。で、それがお前の本当の姿なのか？」パンダに変化していた女の子は頬も着物と同じ朱色に染めあげ、恥ずかしそうに顔をこちらから背ける。

うわ、照れた仕草もかわいいですなあ！……だんだんオッサンに変化してきてるな、俺。

「そ、そうだよ。これがパンダの本当の姿。さっきのが……」  
と、まだ顔の赤い女の子が説明しようとしたそのとき。

耳をすませば、聞こえてくるね。何かが風を切り、全速力で近づいてくる音が。足音。足音。

……妹さまのご帰還だ。

俺は慌てて家の中に飛び込もうとし、はっ、とする。この女の子はどうする？

こんなところに放っておいたら、妹の餌食だ。一応部屋に匿っておこう。

すばやく女の子の腕を掴み、家の中へ突入。障害物はなし。このまま2階の俺の部屋へ逃げ込む！

振り向くと、まだ妹は玄関まで辿り着いていない。大丈夫、このまま駆け抜ける！

「これがかっこいいシーンだったら、ご満悦だったのになあ……」  
今のこの状況は、ただ女の子の手を無理やり引っ張って、自分の部屋へと誘おうとしているだけだからな。一歩間違えれば変態だ。捕まったらどうしよう。だれに？妹とポリスマンに。

ようやく階段を上まで駆け上がり、自分の部屋が見えてくる。それと同時に、玄関の扉が開く音。

「ただいまあ。兄さあん、いますかあ？兄さあん」

下の階から響いてくる、のつたりとした口調の妹の声。

「ねえ、お兄さんって君の事でしょ？だれか呼んでるみたいだよ？」  
喋るんじゃねえよパンダー！この緊迫した状況が分からのか！  
今の声の大きさだと、確実に妹に聞かれただろう。その予想を確定付けるように、下から廊下を走る音が聞こえてくる。

俺は急いで自分の部屋に入ると、南京錠やらなにやらまでたくさん  
の鍵を部屋の扉に掛け、しばらくその場に直立する。

隣の女の子は心配そうにこちらを見上げてくる。そんな顔するな  
よ。こつちだつて心配になるだろ。

主に自分の命が。

妹の床を踏みしめ走る音がどんどんこちらに近づいてくることに、  
俺の心臓の鼓動も早くなつていく。先に言っておくが、俺は毎日こ  
んな生活を送っているんだ。

俺の妹の名は藤谷 美虎。美しい虎と書いて、みこ、と読む。中  
学3年生だ。

その名のとおり、妹は美しい。兄貴が言うのもどうかと思うが、  
そんじょそこの女の子とはワケが違う。ああ……ワケが、違うん  
だ……。

さつきパンダの女の子を「かわいい」と表現したが、美虎の場合  
は「美しい」という表現がお似合いだろう。どこか日本人離れた  
端正な顔立ちに、少々ブロンドに近い茶色の髪。どうみても俺に似  
ていない。しかも、決してハーフではないのだ。俺の両親はどちら  
も生粋の日本人だし。

性格も他人や友人から見れば、完璧だろうな。勉強も運動も成績  
がよく、まさに文武両道。人当たりも良く、自分の美貌を嫌味つた  
らしく自慢したりもしない。

だが、完璧に見える我が妹にも、欠点、欠陥、というものがある  
んだ。

それは、異常なまでのブラコン。

小さいころはまだふつうに思えたが、成長するにつれ、その異様に拍車がかかったように、俺にまわりついてくる様になった。風呂は一緒に入る、飯は隣で食べる、休日は一緒にデートしようなどと毎日うるさい。極めつけは、これだ。いつも帰ってきてすぐ、俺にボディプレスをかましてくる。どんな愛情表現だよ。

美人の妹に好かれる、というシチュエーションを望む男子もいるだろうが、それは今限りでやめた方がいいと思う。最初の頃は嬉しいだろうけど、時間がたつにつれ、ただうざく感じるようになっていくぞ。

そんな忠告をした後、部屋の扉がコンコン、とノックされる。

「兄さあん、さっき、女の子の声が聞こえたんですけどお、どーしたんですかあ？」

続いてノブをガチャガチャと捻る音。絶対開くはずが無い、と分かっていても、心配せざるを得ない。

「あけてくださあい。いるんでしょう？最近やってないボディプレスやってあげますからあ。それがいやならあ、ダブルアームスープレックスにしてあげますからあ」

妹よ。そなたは俺を殺す気か！つか、何気にプロレス技の精度あげてんじゃねえよ！

パンダの女の子もやっと状況を理解したらしく、俺の顔を心配そうに見上げるだけで、何も言って来ない。大丈夫だ。もうそろそろ

……

「じゃあ、無理矢理はいっちゃいますねえ」

そののったりとした口調から想像できないことが、今始まりますから。はは……。

俺はあらかじめ扉の前から女の子と一緒に非難しておいて、アイコンタクトで「驚くなよ」と伝えた。するとあちらも分かったらしく、頷いてくれた。

その2秒後、けたたましい音と共に俺の部屋の扉がぶつ飛び、美虎が入ってきた。

「兄さぁん、ただいまぁ〜」

そしてその更に2秒後には、俺は妹の必殺技を喰らって、床に倒れていたのだった。

遠のく意識の中。最後に記憶にあるのは、パンダの女の子の驚愕した表情だった。

大丈夫。まだ死なない。

あと5分ぐらいは……動いてくれんだろ……心臓。

### 三、朱色の娘と恐怖の妹（後書き）

できれば、感想とか貰えれば嬉しいです。



#### 四、おとしもの、かなっ！（前書き）

主な登場人物

・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう

・ パンダの女の子 ふじたに みこ

・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ

#### 四、おとしもの、かなっ！

俺の部屋の扉はかなり改造されている。

その理由はもちろん、妹に侵入されない為だ。

俺以外がドアノブに触れば電流が流れるとか、どんな衝撃にも耐え抜く素材を扉の材料として使うとか……一般人の部屋の扉とは思えないほど、かなりの装甲が施されている。

元々は何の変哲もないただの扉だったのを、改造オタの同級生に頼んだところ、こうなったのだ。

だがその扉も、我が妹の前では無能に終わった。

なんであいつ、ドアノブを触って平気でいられたんだ？

なんであいつ、あんな最強装甲の扉を蹴りで開けることができたんだ？

そりゃ、藤谷 美虎だからだ……って、あれ？俺、生きてるな……  
…すげえ。

俺はまだフラフラする頭を手で押さえながら、上半身を起こした。自分の部屋。どうやらベットに寝ていたようだ。結局あいつ、ボデイプレスしてたな。なんか腹の中心が痛え。

「おはよう、兄さぁん。っていてもお、もう8時ですがぁ」

隣に当然のようにねっころがる美虎。自分の言った言葉の矛盾をクスクスと笑っている。

大丈夫。今更驚かない。

「お前が俺をノックアウトさせたんだろ。腹が凄え痛いんだけど」

「あらあ、それは大変ですねえ。では、トイレへ連れて行ってあげますう」

「ちげえよ！お前のせいでだ！」

「ほらほらあ、こんなとこで漏らさないくださいよあ？」

「話を聞けえ！」

だめだ、この天然に一々付き合ってられるか。

美虎はまたクスクスと俺の顔を見て笑い、「すいませえん」とつぶやいた。

「……で、あの女の子はどうした？」

「女の子、っていうと、あの着物を着た子の事ですかあ？」

「それ以外ないだろ。どこにいるんだ？」

部屋を見回してみるが、朱色の女の子はどこにも居ない。

「その前に一つ聞きたいことがあります」

瞬間、背筋の凍る感覚。この声の音程。地獄から響く悪魔の囁き。

美虎の喋り方がのったりではなくなったら、それは危険信号だ。

怒ってるぞ、こいつ。しかも、かなり。

「な……なんでしょうか」

こういう時は下手に喋って逆鱗に触れると怖いので、敬語で話すようにしています。

恐る恐る顔を上げれば、満面の笑みがこちらに降り注がれている。だめだ、めっちゃ怒ってる。

「あの女は兄さんとどういった関係なのですか？」

そんなこと、俺だって知らねえよ、なんて言ったら、マッハのパンチが俺の鳩尾にジャストするだろう。以前、そんなことがあったから。いやあ、あの時は……冥界を彷徨ったなあ……。

「それは……ですねえ」

手に汗握る場面、とはまさにこういった状況なのだろうか。冷汗だけどさ。

そもそも、なんでこういう拷問的なものをよりにもよってベツトの上でされているんだ。しかも正座で向かい合って。

「おと……」

もだち、と言おうとした瞬間、美虎の右腕がピクツ、と震えた。

敵、臨戦態勢突入。敵、臨戦態勢突入。今すぐここから逃げてください。

脳がそう訴えているのに、なかなか体は動かない。……いや、逃げて追いつかれるだけだ。ここは、やっぱり言葉だけで凌ぐしかない。

「おとしもの、かなっ！」

今までで一番爽やかにいえたと思う。俺、カッコイイ！ってふいに思ってしまうほどだ。

そのカッコイイ俺の鳩尾に、今までで一番強烈なマツハパンチが入る。

その一撃をくらった俺の体が、『く』の字に曲がったまま後ろに吹き飛び、ベットの下に落ちた。

「ぐべっ」

口から情けない声が出る。くああ……お、でも、今回は……なんとか意識があるぞ。

俺は必死に呼吸しながら、再び美虎へと顔を向ける。

妹はそれでもなお笑っていた。それが余計怖いんだよ。

「兄さん、聞き間違いですか？」

「あっはい、聞き間違いだと思います！」

妹に顔を向けたまま、後ろへと下がっていく。どうせ距離をとっても仕方がないが、気休めにはなる。

「では、もう一度お聞きします。あの女は、兄さんとどういった関係なのですか？」

関係……家の前にパンダが倒れていてあーだこーだ、と今まであったことを全て話しても、信じてもらえるはずが無い。だったら、……言っても、驚かないでくださいよ」

相手をショックさせて、逃げ切るのみ。

「あの子は、俺の彼女です！」

そう大きな声で、言い切った。ぼそぼそ言ったら嘘だと見破られる恐れがあるから、誤魔化すように、大きな声で、豪快に。

すると妹は、笑顔の表情で固まったまま、ベットのの上に倒れてし

まった。

一応顔を覗いてみるが、どうやら気絶しているだけのようだ。というか、これだけで気絶って。

前に友達の女子を家に呼んだときも、この方法で逃げ切った。だが、この技は諸刃の剣。100%成功するが、その後ネタばらしをすると、笑顔でマツハパンチ100連発をお見舞いされることになる。

気絶した妹はそのまま放っておいて、パンダの女の子を探しに部屋を出る。すると、なにやら下の階から焦げ臭い匂いが漂ってきた。美虎、魚でも焼いてたのか？

階段を1段飛ばしで降りて行き、廊下を進んでリビングに入る。中を見渡して、キッチンに人影があるのに気づく。

……まさか、と思いながら、そこへ向かう。キッチンに立っているのは、朱色の着物の上にピンクのエプロンをしていた、パンダの女の子だった。

「おい、お前なにしてたんだよ」

声をかけるとこちらへ振り向き、

「ほっ、ほっとけーきが……上手に作れない……」

と泣きながら訴えてきた。いや、知らねえよ！

四、おとしもの、かなっ！（後書き）

できれば感想下さい^^

五、動物集会なんてかわいいもんがあるのか・・・（前書き）

主な登場人物

・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう

・ 紅 亜 くれあ

・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ

## 五、動物集会なんてかわいいもんがあるのか……

あの後、結局俺がホットケーキを作ってやることになった。

ホットケーキの元を作成している最中、朱色の着物を着た女の子は何度も

「お母さんと同じ作り方したのに……なんで……なんで失敗……」と涙混じりにつぶやいていた。

「なら、お前はまずなんでホットケーキを焼いてたんだよ。さつき食べたろ」

「あれは回復を促進させるためのものの。それにパンダに変化してる状態でなにか食べても、全然お腹いっぱいにならないし」  
まあ、パンダだしな。しかもジャイアントの方。

「そうかいそうかい。つかそもそも、何で人の家で作るうとしたんだ。自分の家でやれよ」

女の子は着物の袖を引っ張って、遠くを見つめるように言った。

「家には、もう帰れないの」

「帰れない……とは、どちらの意味を指すのだろうか。家が無いから、という意味で納得すればいいのか、ワケあって家出てきたから、という意味で解釈すればいいのか。」

「家出少女？」

とりあえず軽い口調で聞いてみる。女の子は少し顎を引き、肯定の意を見せた。

「……ちよつと長くなるけど、聞いてくれる？」

「あ、まあ」

何気なく言っただけど、当たっちゃったよ。俺は出来上がったホットケーキを持って、食卓へと運んぶ。夕飯にホットケーキというのもどうかと考えてしまうが、仕方が無い。いつも飯を作ってくれてる妹は上の階でのびているのだ。

自然な流れでパンダの女の子は食卓の前の椅子に腰かけ、俺はテ



ーブルを挟んで向かいの椅子に座る。女の子の前にホットケーキを置くと、しばし目を輝かせたが、その光はすぐに隠れてしまった。

「そっいえば名前。まだ聞いてなかったよね？」

女の子がハッとしたように目を見開いて言う。

そっいえば、そうだな。というか、色々タイミングが悪かったんだ。美虎のせいだ。

「パンダは、パンダっていうの」

そりゃそうだろうな。一人称がパンダだから。

「でもそれ、本名なのか？」

女の子はうーん、とかわいく首をかしげて考える素振り。

「ももとの名前は、タイシユンマオ クレア 大熊猫の紅亜って名前。パンダっていうのは

……一応偽名だよ」

ばっさりとした偽名だな。

「ターシユンマオ……まあよく分からんけど、名前を隠さなきゃいけない理由でも……」

と言いかけて、すぐ口を噤んだ。俺は無神経に色々な事を聞きすぎだ。少しは自重しろ。この子にも知られたくないことがあるだろうし。

だが、紅亜はそれを気に咎めた様子もなく、

「それは、今から話すね……」

と先程より少しトーンの落ちた声で話し始めるのだった。

「パンダの家は、くまねこぞく 熊猫族っていう一族の血筋を継ぐ家系でね。その血を受け継ぐ人は、さっきのパンダ……あたしみたいに、おっきなパンダに変化することができるの。他にも、世界中にはそんなかんじに動物に変化したり、心を通わせたりすることができる人たちがたくさんいてね。みんな、変化できる動物や、心を通わせることができる動物ごとに、一族となって分かれてるの。例えば、あたしの一族の熊猫族はパンダにのみ変化することができて、獅子族っていう一族ではライオンにのみ変化することができる、みたいな」

そんな人間がいるのか。いや、目の前にいるけどさ、1人。もし

かすると、動物園にも一匹ぐらい紛れ込んでいるんじゃないか？

「熊猫族、獅子族、蛇族、狐族……とにかくたくさんあってね。その一族の長、つまりリーダーの人たちが一年に一回集まって、一族同士で争いを起こさないように集会を開くの。動物集会だっけ？」

なんともかわいらしい集会だ。ぜひとも一回お邪魔したいね

「けれど、その動物集会で事件が起こった。鳥類の力を持つ飛翔族という一族のリーダーが、その集会で他の一族のリーダーに攻撃をしかけたの。そのせいで、動物の力を持つ一族たちは平和を忘れて混乱に陥り、第二次動物大戦が始まった……」

「だ、第二次動物大戦？」

なんか最後ヒストリーっぽくなったけど。なんだ、動物大戦で。

一応人間なんだろそいつら。

つか、第二次ってことは一もあったのか。

「そして今、その真っ最中なの」

「は？真っ最中？」

「そう。動物集会があったのが……一昨日。その日から始まったんだよ、第二次動物大戦」

壁に掛けてあるカレンダーを見ながら紅亜はそう答える。

「けっこう最近じゃねえか。俺達が知らないところで、色々忙しいんだな。」

俺は自分のホットケーキの最後の一切れを口の中に放り込む。パシだけじゃキツイかな、夜は。いや、今それはどうでもいい。

「つまりは混乱なの。飛翔族のリーダーを倒してしまえば、この動物同士の戦争は終わるはず。そこで、あたしはリーダーを倒すために、飛翔族と戦いに行くって家族に言ったの。そしたら、猛反発されちゃって。みんな、ほっとけばそのうち終わるから、って。そんなわけないのに。このままにしてたら、もっと混乱は大きくなっちゃうのに、誰も分かってくれなくて。お兄ちゃんなら、俺も一緒に行くよ、って言うてくれただろうなあ……」

なんて頬を赤く蒸気させながら、何かを思い浮かべる様に天井を

見上げる。

こいつもブラコンなのか。最近は増えてますのお、兄従者が。にしても、この子、なかなかの度胸だな。動物に変幻自在の奴らに、自ら戦を申し込むなんてな。逃げ癖がややある俺がそんな状況に立たされていたら、普通に紅亜の家族に賛成してただろう。

感心しずっと見つめていると、それに気づいて紅亜が夢の世界から帰ってくる。

「と、とにかく、それで家族に反対されちゃったから、やけになつて、あたしは熊猫族やめても戦いに行くからね！って言ったの。したら、お父さんに出てけ、もう二度と帰ってくるな、って怒鳴られて……うう」

唐突に泣き出す紅亜。いや、こんなとこでそんな号泣しないでくれ。

よしよしと子供をあやす様に頭を撫でてやると、「お、お兄ちゃんの方がもっと上手だったし」と突っぱねてきた。せっかくやってあげたのに。というか、撫で撫でするのにも上手も下手もあるか。

「それでね。家出て、ちよつと歩いて、これからどうしようかなあつて考えてたら、突然殺気を感じて……パンダに変化した瞬間、お腹を切り刻まれて、しかも気絶させられて、気づいたら、ここの家の前で寝ていたの」

「よりもよつてなんで誘拐犯はこんなとこにパンダを捨てたんだか……」

見つけたのが俺じゃなくて一般人だったら、動物園に連行されるところだったぞ。俺も動物病院に電話しようとしたし。

「で、話は変わるが、なんでお前は自分のことをパンダって偽名で呼んでるんだ？」

「熊猫族じゃなくなつたんだから、もう大熊猫の紅亜って名前は捨てなきゃ、と思って……」

……こいつはなに言ってるんだか。

「まあ、お前が家出した理由は理解した。だけど、それは理解でき

ない」

紅亜の目に疑問の色が浮かぶ。

「それ？」

「名前。別に捨てる必要ないんじゃないか？」

「……でも、お母さんとお父さんにつけてもらった名前だし……結果、二人とも裏切っちゃったから。二人だけじゃなくて、家族も、一族丸ごと。もう、誰もあたしの名前なんて呼んでくれないよ」

一つ溜息をつく。

「なら俺が紅亜って呼ばせてもらう。パンダなんて呼ぶのは違和感がありすぎるからな」

紅亜の目が、今日何度目か、見開かれる。その瞳には、今回ばかりは疑問も後悔も驚愕もなく、ただ、喜びが満ち溢れていた。

だがこの少女、どうやら素直じゃないらしく、

「それでもいいけどお……ううん」

と顔を赤らめ微妙な了解をしてきた。ツンデレ、ではないな。実際、簡単にデレすぎだ。

彼女は話に一区切りつけ、食事へと戻った。時間がたって硬くなってしまったホットケーキだったが、それでも笑みを零しながらおいしそうに食べていた。

「おい、そんなにメープルシロップ使うなよ。さっきまで半分以上あったのに、もう空っぽになりそうじゃねえか」

「いいじゃん別にー。はい、どばどばー」

「あーあ、それ……」

「うるさいなあ。それ以上ぶつくさ言ったら首の骨以外全部折るよ」

「一応生かしてくれるんだな。首の骨だけ助けてくれるとは……」

「ちっ、ちがうもん！じゃあ変更！首の骨も折る！」

「俺を殺す気か！」

「首の骨以外全部折れてる時点で死んでるもん！」

そつえば、俺らなんか忘れてるなあ……なんだったっけなあ……

…。

ま、いいか。どうでもいいことだって、嫌な事だって、  
忘れるのが一番だ。

あ、妹か。

## 六、自己紹介は豪快にいいよう！な！（前書き）

主な登場人物

ふじたに

・藤谷 鷹太郎

よしたろう

・紅亜

くれあ

・藤谷 美虎

ふじたに

みこ

## 六、自己紹介は豪快にいこうよ！な！

紅亜が丁度ホットケーキの最後の一切れを口にした頃、リビングの戸が開き、おぼつかない足取りの美虎が入ってきた。

目が死んだ魚みたくなってるな。だが心配する気は毛頭ない。いつも俺ばかり肉体的に痛い目にあってるんだ。今度はお前が精神的に苦しめばいい。

「に、兄さぁん……」

「なんだ」

口調が元に戻っている。よかった、怒ってはいないらしい。

「さっきの本当なんですかあ？」

「ああ、今度は本当だ。こんな見目麗しい子は世界中探してもここにしかないからな」

そういえば、紅亜にはまだ「お前、俺の彼女の振りしてくれー」って言うてなかった。……やばいんじゃないか、それは。

俺はできるだけ自然に視線を美虎から目の前にくつろぐ紅亜へと泳がせる。目が合う。だが、当然だけど俺の意思は伝わっていない様子。まあ、聞かれたときに適当にあわせてくれればいいんだけど。「そうですかあ……兄さんの、彼女さん……かわいいですねえ」

顔を綻ばせる美虎。これには驚いた。美虎のことだから「この泥棒ネコおー」とか言うと思ったのに。いや、そう言わない方が嬉しいのだけど……なんだろう、寂しいなあ……。

美虎の視線に居心地が悪いように身をよじる紅亜。背丈は少し美虎の方が大きいようだが、一体この子はいくつなんだろう。

「さきほどはご迷惑をおかけしましたあ。ではあ、みんなで自己紹介しましょ」

俺の考えを代弁するように、そう告げるゆったりのったり口調。合コンみたいだな。

「いえーい！」

いやお前も乗るんかい紅亜。一応ツツコんでしまっただが、俺も「いやあっほー！」

と二人に乗ってみた。我ながら恥ずかしい。てかなんだこれ。「……兄さん、そんなキャラでしたっけえ？ふふ、たまにかわいいですよねえ」

妹に少しひかれた。い、いや、結果オーライだ。早く兄離れさせるんだ。

「ではあ、わたしからでもいいですかあ？」

否定する理由はなし。紅亜を見てみるが、あちらはどうやって自己紹介するか考え中のようだ。

「わたしはあ、藤谷<sup>ふじたに</sup> 美虎<sup>みこ</sup>っていいますう。職業は兄さんの妹ですう。趣味は兄さんにプロレス技を極<sup>き</sup>めることでえす」

そんなプロフィールを持つ妹はこの世におそらく存在しません。あとなんで照れてんだよ。照れる要素一つもないだろ。

「ではあ、次どおぞお」

美虎がにつこり笑顔をこちらへ向けたので、俺の番だなと悟る。

「ええー、藤谷<sup>ふじたに</sup> 鷹太郎<sup>ようたろう</sup>です。よく鷹太郎の鷹という字をそのまま読まれて、たかたろうと呼ばれますが、正しくはようたろうです。お間違いないようお願いします」

これについては思うことがあった。小学生の頃の卒業式に、校長先生から卒業証書を受け取る際「君のことは忘れないよ、たかたろう君」と背中を叩かれたのを覚えている。

すいません、忘れない以前に詐称があるんですけど。

「兄さん、かつこいいですう」

ぱちぱちと拍手をもらう。え、なんで？まあ素直に嬉しいからいいか。

ふと紅亜の反応も気になって、チラッとそちらを横目で伺う。

「鷹太郎……鷹……たか……」

すると、そのやや幼げな顔つきに似合わない思案顔をしていた。そんなに俺の名前に感銘を受けたか。照れるなあ、はっはっは。



「ではあ、趣味や好きな食べ物などもお願いしまあす」  
本当になんなんだこれは。俺も乗ったけど。

「趣味はー……読書かな。好きな食べ物はコーラです」  
「おお、兄さんクールですねえー！」

いや、そこは「食べ物」って言うのになんで飲み物言うんですかあ！」っていう王道なツツコミが欲しかったんだけどな。

紅亜もまだ思案中のようで下を向いてるし。

「あとあ、嘘ついちゃあいけませんよあ？兄さんの趣味は妹いじり、好きな食べ物は妹の下着ですよあ」

「俺はそんな変態じゃねえ！」

勝手に俺のプロフィールを偽造してんじゃねえよ！

「ああ、間違えましたねえ、すいません。趣味は妹のプロレス技を受ける事、好きな食べ物は妹ですよねえ。ふふ」

「本当に食べてやろうか、お前」

「やん、兄さんのえっちい」

「そっちの食べるじゃねえー！」

だめだ、またいつもどおり妹の尻にはまってしまった。

「分かったから、次いけ、次」

「認めるんでしたらもつとわたしと仲良くしてくださいさあい」

「認めてねえよ！」

「むう……仕方ありませんねえ。では、最後をお願いしますう」

美虎は俺の隣の椅子に座り、紅亜に自己紹介するように促す。

まだなにか考えている様子がひっかかったが、すぐに笑顔を見せて自己紹介をはじめた。

「ぱん……あたしは、えーと……く、紅亜くれあです」

「クレア、というのは、どちらの方でしょうかあ？」

姓か名前か、ということだろう。

「あ、下の方で……う、上があー……ふっ、藤谷です？」

なぜに藤谷にした紅亜。あと自分で言っという疑問形にするなよ。

「藤谷……ま、まさかあ！」

そこで妹が異様なオーバーリアクションを見せる。おお凄、ちよいとブロンドの髪が静電気を帯びているみたいにびりびり鳴いている。

「くっ、紅亜さん、いくつですかあ!？」

「え?あたしは13の歳だよ」

「ほ……ならいいですう……紅亜ちゃん、だったんですね」

安堵の色を顔に浮かべる美虎。だが、話の流れがまったく見えな

い。

そんな呆けた俺の表情を察したらしく、

「つまりですねえ」

「紅亜ちゃんと兄さんがあ、もう結婚してるのかなあと思ってえ……でも、13歳ってことは、中学2年生ぐらいでしょう?このまま歳をとっていけば、あたしの方が1つ歳上だから、先に16歳になって、兄さんと結婚できますう……ざまあみやがれえ、紅亜ちゃん」

ああ、だからさつき紅亜が彼女だと確定された時でも、余裕な表情を見せていたのか。まあ、見た感じで歳上か歳下かは判断できるよな。……ってそれなら自分より年下っぽい子がよく自分より年上の兄貴と付き合ってると思ったな。

「って、いやまておい。つまりお前が言いたいのは、16歳になったら紅亜より先に俺と結婚して、紅亜と俺を結婚させないようにする、ってことか?」

「お前じゃなくて、ハニーでしょあ」

「いろいろと間違いがあるな。まずお前と俺は兄弟だから……」  
と抗議をはじめようとしたそのとき、テーブルを挟んだ向こう側から、かすかな寝息が聞こえてきた。そちらへ顔を向けると、紅亜がテーブルの上で腕を組み、その上に顔を埋め突っ伏していた。

「なあ、寝たぞ。起こすか?」

相手に聞こえる最小限の声で問う。

「紅亜ちゃんはある、家は近いのですかあ？」

小さな声でもゆったりした口調なのか。

「いや、めっちゃ遠い。ここまで来るのに4時間かかったらしい」  
家が近いと言って「じゃあ送ってきてください」っていう展開に  
されると困るので、適当な言葉を並べる。送ってきてといわれても、  
どこに送ればいいかわからんし。

「じゃあ、今日は泊まってもらいましょう。ベッドに寝かせ  
ますよあ」

この時ばかりは、妹がとても優しく綺麗に見えた俺なのでした。

まどろむ状態の紅亜に軽く歯磨きさせ、両親の寝室の大きなダブル  
ベットへ寝かせる。一応その傍に妹の服を着替えとして置き、俺  
は自分の部屋に戻る事にした。風呂は面倒だから、明日の朝シャワ  
ーでも浴びればいいか。

自分の部屋の扉が無い事に多少ひきつつ、俺はベットの上へダイ  
ビングする。やっぱり春はいい。暑くもなく、寒くもない、丁度良  
い空気。

が、俺はすぐさま隣の違和感の存在に気づいた。そこが自分のベ  
ットのの上とも言つように、美虎が寝ていたのだ。まあ、寝ている  
分なら支障も死傷もないと開き直って、大して気にするふりはなく、  
俺もすぐ眠りにおちた。

「波乱万丈」な日々のスタートは、明日にせまっていた。

## 朝の遅刻は大変です（前書き）

主な登場人物

・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう

・ 紅亜 くれあ

・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ

## 朝の遅刻は大変です

俺は一応、こうみえて高校生だ。高校生だからには、平日は学校に通わなくてはならない。

朝7時。重たい瞼をこすりながら、1階のリビングルームへ向かう。いつもより遅い起床だ。まあ、家から学校までは徒歩30分。走れば10分で着く。なので、別に遅めに起きたところでどうってことはない。

階段を降りる途中で、昨日風呂に入っていなかった事を思い出し、目的地変更でバスルームに向かう。

バスルームに入ると案の定、暖かく少し湿った空気を感じる。妹がお湯を張ってくれたんだな。

妹は今リビングで朝食を作ってくれている。母さんの代わりだ。こればかりは頭が上がらない。

少し熱めのお湯につかりながら、視界に少し被る前髪を手で掻きあげ、息をつく。こうやっている、昨日のことが嘘のようだ。いっそ、全部夢になってくれても構わないけど。

ゆったり20分間ほど浸かって、ようやく時間に余裕が無い事に気づいた。

「やばいやばい……」

急いで風呂からあがり、大雑把に体と頭を拭いて制服に着替える。リビングに駆け込むと、すでに美虎は朝食を食べ終えたらしく、自分の食器を片付けていた。紅亜の姿はない。

「あらあ、兄さあん、おはようございますう。時間大丈夫ですかあ？」

癒しスマイルをこちらへ向ける美虎。

「ん、おはよ。実際やばいと思うから、お前先行っててくれ」

俺の通う明楼高めいろうこうと美虎の通う天月中たかつきちゅうはほぼ隣合わせになっている

為、俺はいつもこいつと一緒に登校をしている。

だが、さすがに今日は一緒にいけないだろう。

「え……いやですう。だから兄さん、早く食べてくださあい」

机の上の朝食を見て俺は首を横に振る。妹の料理には問題があるのだ。味じゃない。見た目でもない。量だ。アメリカ人ばりに凄い量の朝食が大きな皿の上に乗っかっている。

しかも残すと美虎が怒るから、全部食べなければいけない。怒るってあれだよ？お説教じゃなくて、ほら、例の。そう、プロレス技。先行ってくれ。優等生のお前が遅刻したら問題だろ」

少し皮肉を交えて言ったが、

「兄さんが食べ終えるまで家をでませんよお」

と笑顔で返された。くっ、さすが我が妹だ……。

というわけで、俺は特に味わいもせず、ひたすら食料を胃に流し込んだ。それをテーブルに頬杖をついてながめる妹。さらさらロングのややブอนด์色の髪が揺れる。

「そつえばあ、紅亜ちゃんはどうしましょうかあ？」

俺の急ぎようにも動じないゆったり口調。口の中の物を飲みこむ。「まだ寝てるんじゃないのか？」

「そつじゃなくてえ、このままだとお、遅刻しちゃうんじゃないでしょうんかあ」

そつえば紅亜、あいつ学校通ってるのかな。

まあ、ここは適当に辻褄合わせを。

「昨日言つたら、ここから自分の家まで4時間かかるって。それに今日は休みらしいから、放っておいて大丈夫だ」

「うーん、それならいいんですけど……祝日でもないのに学校がお休みなんて、不思議ですねえ」

どうやらまだ腑に落ちないようだが、俺は飯を食べないと学校へ行けないので、また食事に戻る。

紅亜は、これからどうするんだろう。あの第二次動物大戦とやら

に、参戦するのだろうか。

「それを聞いちゃったら、君も巻き込む事になるけど……それでもいいの？」

お前は何者かと質問した際、パンダ姿の紅亜に言われた言葉が頭をよぎる。

……まさか、な。

## 一、デストロイバリアが打ち破られた！？（前書き）

### 主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・ 望月 典馬 もちつき てんま
- ・ 笠井 蛍牙 かさい けいご
- ・ 紅亜 くれあ
- ・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ



一、デストロイバリアが打ち破られた！？

朝食を食べ終えることになんかの時間を費やしたが、一応遅刻寸前のところで学校に到着することができた。

重い腹を抱えて教室に足を踏み入れた直後、HRの始まりを知らせるチャイムが鳴り響く。だが、担任はまだ来ていない。

窓側の一番後ろというベストポジションの自分の席に着くと、前の席の男子生徒がこちらに振り向き、快活な笑顔で声をかけてきた。「おーす、タカ。お前が遅刻スレスレなんて珍しいな」

俺をタカと呼ぶこの男子生徒は、望月<sup>もちづき</sup> 典馬<sup>てんま</sup>。小さい頃からの幼なじみだ。

ダークブラウンの髪に、アイドルの様に整った顔立ち。体格は俺より少し長身で、引き締まっている。だが、極度のロリコンの為、女子からの好感度はあまり良くない。宝の持ち腐れってやつだ。

「どうせ妹と朝からいちやいちゃしてたんだろーけど？」  
からかうように性悪な笑顔をうかべる望月。

「んなわけねえだろ。ちょっと寝坊しただけだ」

「寝坊……なるほど。昨日は深夜まで美虎ちゃんと……」

「お前の想像力は壮大だな……」

この会話はいつも通りのことなので、適当にあしらっておく。いちいち相手にしたら体がもたない。

それから間もなくして担任が教室の扉を豪快に開け、HRが始まった。

昼休み。俺は教室で望月ともう一人の男子生徒、笠井<sup>かさい</sup> 蛍<sup>けい</sup>と昼食を共にしていた。この笠井こそ、俺の部屋の扉を改造してくれた改造マニアだ。まあ、実際あんま役にたたなかったけどな。

「おい笠井。お前の作ってくれた扉、美虎に吹っ飛ばされて粉碎し

たぞ」

笠井は目を見開き、箸で挟んでいた玉子焼きを落とす。

「ば……馬鹿な……そんなわけが……」

そんなにシヨックをつけることだろうか。俺は大体予想してたぞ。「僕の作った『デストロイバリア』が、たかが人間ごときに負けるなんて……しかも、一昨日藤谷の部屋に取り付けたばかりたぞ……」

「あの扉そんな名前だったのかよ。いや、まず俺の妹は人間じゃないぞ。鬼だ。もしくは虎」

「美しく、なおかつ強い。最高だな美虎ちゃん。ま、でもやっぱ幼女だよなあ」

菓子パンを頬張りながらそう洩らす望月。話をずらすなロリコン。

「僕がもう一度作り直そう。藤谷」

「いや、いいよ。どうせまた、あいつのキックで吹っ飛ばされるだけだから」

そう言うのと、笠井は自分の持っている箸をこちらに向け、

「失敗は成功の為にある！こんなところで人間……いや、虎になんか負けていられるか！」

と格好よく決意する。プライドの高い奴だな。しかも男前。それでこそ笠井なのだが。

「じゃあどうすんだよ」

「なぜ『デストロイバリア』が負けたのか、調査することにした。まだ粉碎されたバリアの部品は捨てていないか？」

「あー、確か部屋の隅にあったかな」

「それを押収し、家で調べる事にする。というわけで、今日は放課後藤谷の家にお邪魔する事にしよう。なに、心配するな。『デストロイバリア』の進化形態『デストロイヤーバリア』が完成した暁には、それを無料で藤谷にプレゼントしよう。もちろん、取り付けも僕が行う」

君はなんて優しいんだ笠井！実際どんなものでも美虎の前では無意味になると思いながらも、俺は笠井と熱い握手を交わした。

「あ、じゃあ俺もタカの家行く」

そこで望月が元氣よく手を挙げた。

「久しぶりに美虎ちゃんと会いたいし」

「忘れたのかよ。美虎はピアノ教室があるから、帰ってもいないぞ」

「えーじゃあ、女たらしのタカが何人家に女を匿っているか調査してやるよ」

おい、なんか聞き捨てならない単語がはいってるぞ。

そういう話に免疫のない笠井は、弁当を食べ終えたのを機会に、俺に「じゃあ、放課後」と言い残してそそくさと自分の席へと帰ってしまった。

「俺は女たらしじゃないぞ。それに、両親がいないからって俺がそこらへんの女を家に連れ込むわけが……」

……あつたな。紅亜を自分の家に半ば強引に連れ込んだ。

ま、まああれは、美虎のせいっていうか、不可抗力っていうか。

「その反応……まさか、お前……」

そんな俺の表情を鋭い洞察力で見破る望月。

俺はすぐに爽やかな作り笑顔を見せて、

「お、俺が家に女を連れ込めるほどの肝っ玉があると思うか？」  
とごまかす。

「……じゃあ、お前の家、行ってもいい？」

「お、おう、別にいいぞ。放課後な」

どうせ笠井も来るんだ。パツと自分の部屋に案内して、パツと帰ってもらえばいい。

でも、そんな上手い具合には、俺の人生はできていなかったんだよ。



## 二、凡人の日常を破る招待状（前書き）

### 主な登場人物

- ・藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・紅亜 笠井 くれあ かさい
- ・望月 典馬 もちつき てんま
- ・藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・蛍冴 けいこ

## 二、凡人の日常を破る招待状

気だるい授業を全て終え、放課後。

俺がここ明桜高に入学してから、まだ一週間とちよつと。クラスはまだ顔も覚えていない同級生達は、これからどの部活を見学に行くか話しているようだ。俺は中学の時から続けていた卓球部に入部する事を決めていたから、今更見学がどうのという必要は無かった。

生徒玄関から外へ出ると、校門の付近で望月と笠井が夕日に照らされながら俺を待っていることに気がついた。あいつら早いな。

二人の下まで駆けて行く。てか、なんで二人して黄昏てんだよ。

「じゃあ行くぞ」

俺がそう声をかけると、

「僕の『デストロイバリア』は一体どうなっているんだろうか……」

「いやあ、タカの家行くの久しぶりだなー」

各々俺の家への不安と期待を言い、歩き出した。

「そついや、タカさ。なんで部屋の扉、けいごに改造してもらったんだっけ」

右隣の望月が自分の前髪をいじりながら聞いてくる。

「前言つたる。妹の進撃を防ぐ為だ」

すると望月は理解できないとでも言いたげに首を左右に振った。

「あんな美人な妹に攻められるのが、なんで嫌なんだか」

「あいつ、家に帰ってきてから俺にボディプレスするのが日課になつてんだぞ」

「いいじゃん、相手が美人ならなんでも許せちゃうだろ。ま、俺は……」

「幼女が一番、だろ。そんなに好きなら保育園から出直して来い」

こいつは自分の性癖をためらいも無しに人にさらけ出してしまふ。

だからモテないんだろうな。勿体無い勿体無い。

「にしても、藤谷の妹は本当に凄いな」

さりげなく話をそらす様に笠井が呟く。笠井も望月と同じく小さい頃からの仲だから、過去に何度か美虎に会った事がある。

「初めて見たときからなにかオーラが違うと思っていたが……まさか、扉を蹴り飛ばすほどとは。次は蝶番ちょうつがいのところもしっかり強化しなければな……」

笠井、お前キモい具合に顔がにやけているぞ。どんだけ改造好きなんだよ。

ここだけの話、実際笠井も平均と比べれば顔は整っているほうだ。眼鏡をして、しかも前髪のカーテンを閉めているから、あまり女子からは注目されないが。しかも改造マニアという肩書きがある。自分から近寄ろうと思う人間は少ないだろう。

「にしても、羨ましいよなあ。女の子と一つ屋根の下で生活なんて」

再び話をそっち方向へ戻す望月。

「なのに、タカいっつも言ってるよな。「妹が鬱陶しい」って」

「そりゃ四六時中ベタベタしてきたら、誰でもそう思うだろ」

ましてや実の妹だ。顔は似てなくとも、血の繋がった家族。

「じゃあ、俺が奪っちゃおうかなあー」

「できる事ならやってくれ。俺にはプライベートってもんが無いんだ。飯食べるときも一緒、登校する時も一緒、寝るときも一緒、風呂はいるえぐべえ！」

言ってる途中で望月にぶん殴られた。こいつ、今本気でやったよな？

「羨ましいんだよおおー！」

俺に向けてじゃなく、夕日に向けて吼える望月。それを青春とばかりに眺める笠井。いや待て笠井！これは青春じゃなくただの嫉妬だ！

しばらく時間が経ち、ようやく落ち着いた様子の望月は一つため息をつき、

「いいよ、いいもんどうせ。ばくろりこんだもん……一生」

と果てしなく気持ち悪いセリフを吐いていた。そんな望月<sup>ロリコン</sup>を俺は軽蔑の眼差しで見つめながら、

「ほら着いたぞ」

と背中をドンと叩いてやった。町と町の境目に存在する、藤谷宅。

玄関の鍵を開け、2人を家の中へと誘う。

「みいーこおーちゃん、もおーいーかあーい？」と言ったのが望月。家に美虎がいると思っっているらしい。さっきピアノ教室があるって言っただろ。

「ピンポン、お邪魔します」と言っただけで玄関に靴をしっかりと揃えたのが笠井。何故チャイムを口で言っただけで、こいつ、今更だけど天然だよな。

家の中は人の気配がなく、気味が悪いほど静まり返っていた。紅亜は居ないようだ。どこへ行ったのだろうか。

俺は後ろに二人を連れて、二階へあがる。そのまま二階の廊下を進み、自分の部屋の前へ。

が、俺はそこで絶句した。扉がないのは、もちろん美虎のせいだが、その奥。俺の部屋の中。

空き巣に荒らされたかの様に、部屋の中がめちゃくちゃになっていたのだ。後ろから望月と笠井もその光景を目の当たりにして、驚いている。

恐る恐る部屋の中へ。机の下やベットのの上に、切り裂かれた布団や枕から飛び出たであろう羽毛が散乱している。棚に収められていた漫画や小説なども、ひとつ残らず床に落ちていた。

と、そこで更にある異変に気づいた。壁や床のいたるところに、獣に引っかかれたような爪痕があるのだ。しかも、猫なんて比べ物



にならないほどの、巨大な痕。

「お、おい、タカ。これはさすがに、美虎ちゃんの仕業じゃないよなあ？」

望月が震える声で聞いてくる。俺は、当たり前だ、と頷いてもう一度部屋の中を見渡した。

そこで、笠井が俺に一切れの紙を見せてくる。

「これ、そこに落ちていた……いまいち意味はよく分からないが」俺はそれを受け取り、すばやくそこに書いてあった殴り書きの文字を読む。紙にはこう書かれてあった。

『熊猫族の女を返してほしいのなら、いますぐ天月公園へ来い。』

日が沈むまでに来なければ、こいつの命はないと思え』

ドラマではありきたりではあるが、実際自分がその場面を体験することになると話は別だ。

これはまさしく脅迫状。だが、身代金要求などではないようだ。俺自身に用があるらしい。

「どうする、藤谷。警察を呼ぶか？」

笠井が制服のポケットから携帯電話を取り出す。だが、俺はそれを手で制した。

「いや、いい。俺一人で行ってくる」

「でも危ないぞ。どんな奴だかは分からないが、お前も殺されるかもしれない」

こんな状況でもいたって冷静な笠井。いや、俺もか。

「警察なんて呼んだのがバレたら、人質だって殺されるかもしれないだろ。大丈夫だって」

笠井は俺の手が震えていることに気づいたようだが、そこからはもう反論しなかった。

俺は二人は置いて、部屋を出た。次第に歩調が早くなっていく。階段を降り、玄関の扉を開いた頃には、俺は全力で走っていた。

部屋中にあつた獣の爪痕。脅迫状の内容。あれは空き巣の仕業なんかじゃない。

あの脅迫状を書き、紅亜を誘拐したのは、紅亜と同じ、動物の力を持つ一族だ。

### 三、ライオンに同情・・・そんな馬鹿な（前書き）

#### 主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・ 紅亜 くれあ
- ・ 望月 典馬 もちつき てんま
- ・ 笠井 螢牙 かさい けいこ

### 三、ライオンに同情……そんな馬鹿な

こんなに時間に追われてると感じたのは、この短い人生の中で初めてかもしれない。

かろうじて夕日は頭のとっぺんをみせているが、このままじゃ俺が天月公園に着く頃には隠れてしまっているかもしれない。

そうやって自分を急かしたところでこれ以上早く走れないのは分かっている。でも、そうでもない限り間に合いそうにないんだ。

必死に酸素を求めるように、乱れた呼吸を整える。日が丁度沈んだ頃、俺はようやく天月公園に辿り着いた。

だが、様子がおかしい。公園の様子だ。小さな天月公園を囲むように、大勢の人間が群がっている。まるでプロレスの試合でも観戦しているように、ところどころから「いけえー！」だの「そこだあー！」だのと聞こえてくる。……あれ？場所間違った？

確認の為、人込みを掻き分け前の方へと進む。まさか喧嘩？こんな公園で？そういう青春な事は河川敷でやってくれ。

やっとの事で一番前まで来ると、そこには驚愕の光景が広がっていた。

プロレスの試合。ある意味合ってる。喧嘩。ある意味合ってる。

なんと公園の小さな敷地の中で、ジャイアントパンダとライオンが戦っていたのだ。というか、一方的にパンダがライオンを虐めているようにしか見えない。あ、殴った。パンダ殴った。痛そうだなあ……。

と、そこで俺は我に返る。ライオンに感情移入してる場合じゃない。あのパンダは紅亜の变化した姿で間違いないだろう。で、虐められているライオンはおそらく、紅亜を誘拐した犯人。

……なんで？なんで誘拐した犯人が被害者に虐められてんの？む

しろもうライオンの方が被害者じゃん。あ、ボディプレスが炸裂した。あれは体重的に美虎のより絶対痛いと思う。

こんなに楽しんでいるのに邪魔するのモどうかと思うが、そろそろライオンの方が可哀そうになってきたので止めに行くでしょう。とりあえず、一通りの話は家に帰ってから聞くとして……

「おーい、紅亜！」

「あつ、鷹太郎！」

パンダは俺の声に反応し、ライオンをボディプレスで下敷きにしたままこちらに手を振ってくる。

「一旦家に帰るぞー」

「おっけー。今行くー」

そう言う今一度パンダは天高く舞い上がり、最後に渾身の一撃をライオンにお見舞いしてやった。

下敷きになって死にかけている百獣の王に満足気な表情をして（多分）、パンダはこちらへ歩み寄って来る。

「今、喋ったよね？」

「喋った……と思う」

「え、嘘……！？」

あちこちから驚きの声がちらほら出始める。大丈夫、いきなりのこと観客の頭はまだ混乱しているはずだ。今のうちに忍者のように素早く逃げよう。

俺は軽やかに人込みを掻き分け、たっさつき走ってきた道に戻る。そして、自分の家へ向けて全力疾走。ちらつと後ろを振り向くと、でっかいパンダが人間の頭上を飛び越えているところだった。いやもうあいつはパンダを超えてるぞ絶対。

地面へ華麗に着地してこちらへと走ってくる紅亜。まあ、ジャイアントパンダ。こうやって見ると、俺が追われているみたいでかなり怖いな。

後ろに天月公園と人間の群れが見えなくなったところで、俺は走

る事を中断して道路の真ん中に座り込んだ。

「鷹太郎、大丈夫？」

いつの間にか人間の姿に戻っていた紅亜が、心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

俺は口を動かすのも億劫だったので、親指をたててみせた。

「あつ、いいこと思いついちゃった！」

「え……なに……」

息切れしながら必死に口を開くと、紅亜はまた黒い煙と共にパンダに変化し、自分の背中をちよいちよいと小さな爪で示した。

「疲れてるんでしょ？乗って乗って」

「は……はあ？パンダ……に？」

まず、パンダって乗っても大丈夫なのか？走っている途中に振り落とされそうで怖い。

「絶対……危ない。……信用できない」

ようやく呼吸が正常化してきた。よし、走れそうだ。

「なに、あたしに乘れないっていうの？」

ツンとして、それでいて可愛げのある妖精の声。

ああ、だめだ……俺はこの声に弱いらしい。

「分かった、乗る」

気付かぬ内に即答していた。

「ならいいけど。ほら、早く早くー」

子供のように無邪気な調子で急かしてくる紅亜。これがまたいい。……. どんどん俺洗脳されてるな。

巨大な背中に跨り、そこでふと疑問に思うことがあった。

「どこに掴まればいいんだ。毛か？」

羊のように油っこい毛を指で撫でる。

「あつ、だめえ……」

くすぐったそうに体を振るわせるパンダ。こいつ、前もそうだったけど少し触られただけでデレデレしてくるよな。変な奴。

「うっ……じゃあ、胴体にうでまわして、しっかりつかまって」

俺は言われたとおりパンダのどでかい胴体に腕をまわし、後ろから抱きつくような姿勢をつくる。これがパンダじゃなければなあ……。

「……ね、ねえ……」

「ん？」

「……恥ずかしい……かも」

「はあ？お前がやれって言ったんだろ」

「そうだけど……ま、まあいいや。後ろにペンギンでも乗せてる気持ちで……すーはー……うん、大丈夫！」

俺はペンギンかい。いやペンギン好きだけでも。

「じゃあ、いきまーす……全速、全身ッ！ー」

そのかけごとと同時に、体が浮かぶ感覚に陥る。え、ちよつ、速すぎだろこれ！景色がブレてるよ！

……パンダに乗って街中を駆け巡る少年……TVに出れるよな、これ。

#### 四、つまらないよりはマシなんだよ（前書き）

##### 主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・ 紅亜 くれあ
- ・ 望月 典馬 もちつき てんま
- ・ 笠井 蛍牙 かさい けいご



#### 四、つまらないよりはマシなんだよ

「で、何故あんなった」

俺はある程度真剣な面持ちで目の前の椅子に座る少女に問いかけた。ここは藤谷宅リビングルーム。すでに望月と笠井は帰っていたので、俺は電話で2人に「無事だ」とだけ伝えた。

「あんなった、って？」

美虎の白いワンピースに身を包んだ紅亜は首をかしげた。

「じゃあ、まず確かめておこうか。あのライオンはなんだ」

「俺は獅子族のアレンだいー、とか言ってた」

「分かった。本題にしろ。じゃあ何故お前は、あんな公衆の面前でどこぞのライオンとじゃれていたんだ」

時刻はそろそろ7時をまわる。妹がいつ帰ってきてもおかしくない。早くこの話を打ち切らなければ。

「話、長くなってもいい？」

「できれば要約してくれ」

「えー……うん、分かった。なんかお昼頃にね、鷹太郎の部屋漁ってたら……」

この際つつこむのは無しにしよう。

「突然ライオンに乗った男の子が部屋に入ってきて、「ちっ、熊猫しかいねえのかよ」とか言って襲いかかってきて……」

熊猫しか……ということは、さっきの脅迫状から読み取るように、俺にも用があったのか。

「あたしその時油断しててね、頑張ったんだけど、捕まっちゃって……。それで、公園に連れて行かれて「お前なんかエマルノスも必要ねえ」とか言って乗ってたライオンをどっかに逃がして……」

エマルノスというのはアレンとかいう奴の乗っていたライオンの名前だろう。ということは……

「それで、あつ、これチャンスだ！と思ってパンダに変化して、男

の子をボコボコにしてあげたの。あっちもライオンに変化したけど、すつつつごく弱かった！」

笑顔でVサインを作る紅亜。違う、きっとお前が強いんだ。

つまり、ライオンさえどっかに逃がさなければ紅亜にチャンスを与えずに済んだのに、という話だ。

アレンという奴も馬鹿だな。

「で、アレンって子と戦ってたら鷹太郎が来たの」

「なるほどな……あいつ、死んでなきやいいけど」

俺が心配するようにそう言うと、紅亜は少し顔を伏せ

「あたしも、できれば飛翔族以外の一族とは戦いたくないんだけどね……」

とトーンをおとした声でつぶやいた。

嘘つけ。ノリノリでライオンにボディプレスきめていただろうが。

「まあ、無事でなによりだ。すっげえ心配したけどな」

しよぼ暮れた紅亜に笑い飛ばすように言う。

「べつ、別に、こなくても良かったのに……」

照れを隠すようにそっぽを向く紅亜。赤くなったみみたぶが隠れていませんよ。

また変なところでツンのスキルを発揮してくるなあ、こいつは。

「アホか。あのまま続けてたらアレンっていうの死んでたぞ」

俺があのまま放置してたら、冗談じゃ済まされない結果になっていたかもしれない。

「それはあ……うん。ごめんなさい」

素直に頭を下げる。よし、良い子だ。

「……分ければ良し。一応、お前も誘拐された身だしな」

と、そこで少し気まずい空気が流れる。お互い何を話せばいいか分からないんだ。こういうときに美虎が帰ってきてくれれば良い……

いやよくないよくない。どうせ兄貴虐待劇が始まるんだから。

俺はそんな空気に耐え切れなく、頭の中をまさぐって話題を探す。

「あー……そうだ。もしかしたら、またそいつここに戻ってくるんじゃないか？」

「そいつ、ってアレンって子？」

「そう。なんか良く分からんけど俺にも用事があったみたいだから」  
「そもそも、狙っていたのは紅亜じゃなくて、俺だったんじゃないか？と今までのことを思い出すと、そう思ってしまう。」

そのことを紅亜に話すと、

「あたしもそう思う。公園に向かう途中で何度も「なんであいつがいねえんだよ」ってぐちぐち言ってたから」

「けど、そこで疑問が生じる。なんで俺を狙うのか。」

「俺はごく一般的な男子高校生だから、動物の一族なんかに狙われる理由なんてないはずだけどな」

そこで、紅亜はなにやら渋い表情を見せる。

「……実はあたし、心当たりがあるの。鷹太郎が狙われる理由に」

「心当たり？一体どんな？」

「気になって少し身を乗り出す。だが、よほどいいにくいことなのか、口を噤んだまま話さない。」

「あたしは……信じてないけどね」

紅亜はまるで自分に言い聞かせるようにしてボソツと呟いた。信じてない？だめだ、全く話が見えないぞ。

「俺には、教えてもらえないのか？」

静かに問う。すると椅子に座った少女はコクリと頷く。

「そうか……なら、今は良い。じゃあ、次にライオンの少年が襲ってきたときの為の対策を考えようか」

仕方なく了承し、俺は雰囲気を変えるべく話題を切り替える。なんか今日は湿っぽい空気になってばかりだな。

「なんか……鷹太郎、巻き込んでるね」

今更かい！

「お前、忘れたのか？」

「へ？」

「俺がお前と初めて会ったとき、昨日な。お前に「巻き込んだじゃうけどいい？」って聞かれて、俺は「別にいい」って答えたじゃねえか」

ちよつと内容は違うが、そんな感じだったはずだ。

「そ、そうだけど……またさっきのライオンとか来たとき、今度は鷹太郎、殺されちゃうのかもしれないんだよ？」

こいつ、昨日は完全「藤谷巻き込む事決定」みたいに納得してたのに、今になって俺の心配をしてくやがる。あの時と立場が真逆だな。俺が巻き込まれることを望み、紅亜が俺を巻き込むことを躊躇ちゅうちゅうしている。

「どんなことでも、つまらないよりはマシなんだよ」

いつか言った言葉を繰り返す。あ、昨日か。

すると紅亜は悩ましい顔を満面の笑顔に変え、

「じゃあ、どんなことがあっても逃げないでよね！」

そう元気な声で告げた。

今思えば理不尽な話だが、俺はそれが心地良いと思っている。

俺は元々、そこら辺に生息する極一般な高校生だったんだ。ただ、家の前に怪我をしたジャイアントパンダが転がっていただけ（？）で、それをそのまま放置する道だつてあつたはずだ。まあ、放置したところで邪魔になつて家の中に入れないし、妹に発見されるだろうけど。

それを、故意は無いとはいえ、わざわざ自分から危険な道へ進むことを決めたのだ。パンダに正体を聞き、それによつて俺はそつちの道へと足を踏み入れてしまった。今日の朝までは、それを後悔し続けていた。

けど今は違う。俺はこれからの展開を受け入れるつもりでいる。まあ簡単に言えば、ここまできちゃったんだから、最後までいくしかないっしょ、という前向きかつヤケクソなのが今の俺だ。最後というのが、どこまでかは測り損ねるが。

更に簡単に言っ  
てしまえば、単  
に紅亜と一緒に  
いたいだけ、とい  
うことだった。

## 五、えー、これが最強武装？（前書き）

### 主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・ 紅亜 くれあ
- ・ 望月 典馬 もちつき てんま
- ・ 笠井 蛍牙 かさい けいご

## 五、えー、これが最強武装？

現在地、自分の部屋。カーペットが敷かれている床の上に座りながら、テレビのバラエティ番組を眺めていた。あの後すぐ帰ってきた美虎にスマイル全快の蹴りをくらった。すげえ脇腹いたい。

そんな俺の横に鎮座するのは、リビングからついてきた紅亜。熱心にテレビと睨めっこしている。

「……なあ。お前っていつまでこの家にいるんだ？」

その紅亜へ向けて、なんとなく気になった事を問いかけてみる。

「あ、そのことなんだけどね」

紅亜はテレビを見つめたまま、

「あたし、今日からここに住むことにした」

……予想はしてたけど。なんか心の底で喜んでる自分が悔しいような。

「っていうか、あたりまえでしょ。鷹太郎もあたしと一緒に動物の一族達と戦うんだから、そうやすやすと別の所になんて……」

え、あれ？聞き間違いかな？なんかいま「一緒に戦う」って単語がでてきた気がするんですけど？

「あのお……今の言葉、もしかしてもしかすると、俺も戦う、って意味でしょうか？」

「？そうだけど……それがどうしたの？」

……ああ、なるほど！「戦う」っていうのは、応援してやる、という事か！そうだよな、サッカーの試合だって観客と選手が一緒に戦っているって言うし……。

そんな俺の安堵の表情をなぜか不思議に思ったらしく、紅亜は

「鷹太郎、喧嘩とか好きなの？」

と聞いてきた。はい？喧嘩？

「何で？」

「だって「自分も戦う」って知って、嬉しそうな顔てたから」

「そりゃ、応援ぐらいなら俺にだってできるし」

と、そこで紅亜が眉を寄せて「？」と首を傾げる。え、何、その仕草。かわいいね。

「なんか勘違いしてるみたいだけど、「戦う」っていうのはそのままでの意味だよ？ 鷹太郎にも、あたしと一緒にライオンと戦ってもらうからね」

……はいいい？

そこでさらに追い討ちをかけるべく、

「ライオン以外にも、きつとあたし達の目標の「飛翔族の頭首を倒して戦争終結」を邪魔してくる人達がいるだろうから、それも一緒に倒して行こうねっ！」

と張り切っている限りの言葉をぶつけられる。

こいつは馬鹿か。

「ちょ、ちよつと待て！ 絶対無理だろ！ お前は最強パンダになれるからいいとして、俺は極一般人人間だ！ ライオンにちよつと引っ掻かれただけでも死んじゃうぞ！」

銃や刀を持っていればなんとかなるかもしれないが、そんなもん持って街中でライオンと乱闘なんてしてたら、銃刀法違反やら動物虐待やらで逮捕されちまう。

「ふっふー、そんなこともあるのかと、あたしも家から『最強の武装』を持ってきたんだー」

危なげな笑みを浮かべる紅亜。持ってきた、って、お前持ち物なにもなかっただろ。

「とくにご覧あれ！」

その言葉の末尾を言い終えると同時に、紅亜は左手の中指と親指を擦り合わせ、指パッチンをする。だが、その音が摩訶不思議なものだった。軽快なパチン、というものではなく、涼しげな風鈴の音色。



どういった構造なんだ、お前の指は。

そう思うより早く、いきなり紅亜のすぐ傍の床から黒煙が吹き起こるようにして現れる。待て待て待て、お前は次から次へと魔法使いか。

その黒煙を紅亜が息で吹き消すと、そこにはなにやら衣類のようなものが畳まれて置かれていた。

「じゃじゃーん！これぞ……なんだっけ？伝説のお……ホニヤララ！」

名前も知らんのかい。

「熊猫族の前頭首が第一次動物大戦の時にどこかの一族から奪ったものらしいんだけど、熊猫族の誰が着てもなんにも効果がなかったらしいから、あたしが貰ったの」

紅亜は伝説のホニヤララを手に取り、持ち上げて俺に見せてくる。どうやら上下でわかれているようだが……どう見てもジャージにしか見えない。前にファスナー着いてるし。

「これが、最強の武装？てか、誰が来ても効果がなかったんなら、俺でも効果はないだろ」

つかこれ、すごく胡散くせえ。絶対ただのジャージだ。こんなん着ても機動性が良くなるだけだぞ。

「何その顔お。そんなこと言うなら、ためしに着てみなよ」

ジャージを胸に押し付けられる。……まあ、着るだけならいいだろう。動きやすかったら部屋着として使えばいい。

紅亜に後ろを向いてもらい、約20秒。あっという間に着替えてみたが、なんとこのジャージ、そんじょそらのジャージではなかった。

上下を着た瞬間、体が浮いてると錯覚するくらい軽くなった。っていうか、ちよつと浮いてる気がする。ここで思いつきりジャンプすれば天井を突き抜けて大気圏突入できそうな程だ。

「おい、このジャージすげえぞ！」

初めての感覚にテンションが急上昇した俺は、体の軽さを更に実感するべく、部屋の中を走り回ってみる。なんだこのジャージ！最高じゃねえか！

「ど、どうしたの、鷹太郎。気持ち悪いよ」

その光景におもいつき引き紅亜。

そこで我に返る俺。うわ、恥ずかしい、人の前で。

その感情を誤魔化すため、おとなしくジャージを脱ぐことにした。最近我を忘れてばっかだなあ、俺。

「な、なっ、ななな……」

俺に視線を向けながら顔を真っ赤にする美少女。お前さんはすぐ顔を赤くするねえ。どうしたんだい。

「ひゃ、へっ、へっ……」

「あ、くしゃみならあっち向いて……」

「へっ、変態だあー!!」

……あ、やべ、普通に女子の前でパンツ姿晒しちゃったよ。……いや、普通そんぐらいで人を変態呼ばわりするか？

と思いふけていると、後ろからトントン、と壁をノックする音。瞬間、背筋が凍りつく。

振り向けば、笑顔のまま氷点下の眼差しでこちらを見つめる妹が1人。美虎さん、目が笑っていません。

「兄さあん、いたいけな女の子に自分の下着を見せつけて喜んじゃいけませんよお？」

「こっ、これはわざとじゃない！信じてくれ美虎！」

なおも冷たい眼差しで俺の顔を見つめてくる妹は、とても恐ろしかった。なんで笑顔なんだよ。笑顔が怖いんだよ。

「兄さあん」

「……なんだ」

「写真撮ってもいいですかあ？」

俺は振り向いて紅亜に問いかける。

「本当の変態はあいつだろ？」

「まっ、まず下を履けえー!!」  
おっと、そうだった。

## 六、必殺タイガーショック！（前書き）

### 主な登場人物

- |                                       |                                   |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| ・ 藤谷 鷹太郎<br><small>ふじたに ようたろう</small> | ・ 藤谷 美虎<br><small>ふじたに みこ</small> |
| ・ 紅亜<br><small>くれあ</small>            |                                   |
| ・ 望月 典馬<br><small>もちつき てんま</small>    | ・ 笠井 蛍牙<br><small>かさい けいご</small> |

## 六、必殺タイガーショック！

先程の俺の「女子に自分の下着を見せつけて楽しんでた」という誤認された行動により、美虎はかなり機嫌が悪かった。

8時。そんな陰悪ムードのまま、夕食に。

「な、なあ、美虎」

「なんですかあ、兄さん」

いつも通りの笑顔に見えるが、これは違う。俺もそんなに鈍感じゃない。

美虎の口元がひきつっているのが見て取れる。

「……機嫌直してくれよ」

「なに言ってるんですかあ兄さん。わたしはこの通り、とても機嫌がいいですよお？」

更に自分の笑顔を最大限にしようと口元を広げる妹。正直、見られない。

俺のテーブル越しの右斜め前、美虎の隣の椅子に腰掛けている紅亜は、「あたしは関係ありません」とでも言うように、白々しく白米を口の中にかきこんでいた。

こいつは俺を構う気などさらさらないようだ。

「兄さんも、はやくごはんを食べてくださあい。冷めてしまいますよお」

俺はひとまず弁明するのをあきらめ、右手に箸を持ち、皿に目を移す。うげえ、やつぱ量が半端じゃない。

ただどこでそんな態度をとったら「殺害」フラグがたってしまうので、できるだけ自然な表情を作って左手で茶碗を持ち上げる。

早く親父たち帰ってきてくんないかなあ。こんな高カロリーな食事を繰り返してたら、いつかどこぞのホニャララデラックスさんになりかねない。

なんともいえない空気の中黙々と食事を続け、見事一番に食べ終わった紅亜。かなりの大食いらしい。

紅亜は箸をテーブルの上に置くと、これから何をすればいいのだろうと俺の顔を見てきた。

すると美虎がここぞとばかりに、

「ところでえ、聞きたいことがあるんですが、いいですかあ？」

と紅亜と向き合うようにして体をずらした。俺ではなく、紅亜への質問のようだ。

「紅亜ちゃんはある、この後どうするのですかあ？」

聞かれた紅亜は「こっちが聞きたい」とでも言うように顔を悩ます。そして、再び俺の顔へ助けを求めてくる。大丈夫だ紅亜。お前が何を言おうと、結局は美虎の拳が俺の鳩尾を捉えるんだから。……いやいや、勘弁してください！

当然ながらアイコンタクトでそんな意図が伝わるけないので、俺は仕方なく口を開く。

「紅亜はあー……」

「変態兄さんには聞いてませえん」

ちよつと待てや！『兄さん』の前にいらない付属語が付いてるぞ！美虎は今一度問い直そうと紅亜の顔を見つめる。

すると、紅亜はその言葉を遮るように、

「鷹太郎と、一緒に住む」

とバカ正直に答えた。なんか言い回しがおかしいと思うんだけど？瞬間、美虎の体が痙攣したようにビクツと跳ね上がる。

「い……いつ、一緒に……まさか!？」

昨日の繰り返し如く、美虎が目を見開く。その瞳の中には驚愕の渦。

「……そうですかあ……一緒に、ですかあ」

自分を落着かせようとしているのか、瞼を閉じ、しばらく考えるように黙り込む。

しばしの沈黙の後、美虎はゆっくりと顔を上げる。なんだあの顔。

今から戦へいく戦国武将ばりにキリツとしている。

「彼女、ですもんねえ……」

美虎は、はつきりとそう口から洩らす。そうだ、紅亜にそのことについて話していなかった。昨日は都合よく逃げ切れたが……。

この状況はまずいだろ！

「え？彼女？」

ほら見る、紅亜が疑問符を浮かべて首を傾げてる。確実に良くない方向へ……

「彼女なんですよねえ、兄さんの」

と思ったのも束の間、ついに美虎から言い放たれた、紅亜への質問。絶対絶命。

最初、頭が理解に追いつかなかった為か、ぼーっとしてた紅亜。だが数秒間をおいて、みるみる内に顔が美白から赤へと移り変わっていく。まるで春夏秋冬の季節の移り変わりをかんじさせるような

……じゃなくて！

このまま放置すれば、

「彼女じゃないもん！」

「これはどういふことでしょうか兄さん？」

「あ、実は昨日のあれ嘘で……」

「はい変態嘔吐きクス兄さん地獄へ堕ちて帰ってこないで下さいばあ〜い」

って構図が成り立ってしまう！ってか俺の想像の美虎毒舌すぎるだろ！

「み、美虎！」

命の危機を感じ、俺は無意識に大きな音を立てて椅子から立ち上がっていた。美虎は俺のいきなりの行動に驚いて、こちらに釘付けになっている。

……俺は、この状況をほぼ100%抜け出せる術すべを持っている。だが、それは使った後、使用者の寿命を大幅に削る諸刃の剣。……二度と使いたくはなかったが、仕方が無い。

「おつ、俺は紅亜も愛しているが……」

もちろん嘘だ。可愛いとは思っけだな。

ちらつと紅亜の顔を窺うと、今にも湯気が出そうなほど蒸気している。頼むから、今だけは叫ばないでくれ。

俺は大きく息を吸い、紅亜に叫ばれる前に叫んだ。家中に、街中に響き渡るほどの声で。

「その何十倍も、お前のことを愛しているんだ!!」

そう、叫んだのだった。美虎の目を半ば睨み付けるようにして視線を逸らさず、人生初の告白をした。大声で。しかも、実の妹に。

案の定、兄から熱い告白をされた妹は驚いた表情で固まったまま、後ろへ椅子をひっくり返して倒れてしまった。

念のため顔を覗き込んでみる。……気絶してる。どうやら助かったようだ。

「……ふう」

安堵の息が口から零れ落ちる。これで妹をショックで気絶させるのは何度目だろうか。もうそろそろ技名でもつけた方がいいんじゃないのか。『タイガーショック』とか。ダサいな、はは。

俺は極度の緊張から抜け出せた開放感で、椅子ではなくその場の床にへたりこんだ。

と、そこで耳をつんざくような高い声がりびングに響き渡る。

「誰が彼女だぁー!!」

紅亜の声。

「く、紅亜、落ち着け。あれは……」

「うるさいうるさい! 鷹太郎のばかぁー!」

待て待て! なんて怒ってんだよ! 驚きは怒りに変換しなくてもいいんだよ!

俺は怒り狂う紅亜を後ろから羽交い絞めにして落ち着かせる。こいつパンダの時はあんなに強かったのに、元の姿に戻ると普通の女の子と同じぐらいの筋力になるんだな。



必死になだめる事数分。ようやく落ち着きを取り戻した紅亜に訳を話す。

「そ、それなら早く言ってよ……もう」

取り乱したのが今になって恥ずかしくなったらしく、そっぽを向いてそう言ってくる。

「だから、今度また美虎にそう聞かれたときには、ちゃんと「彼女です」って答えてくれ。いいな」

「やだ」

きつぱりと断られたー！

……これ、けっこう辛いな。「やだ」って事はつまり俺の彼女と思われたくない、ってことだろ。

そうやって落ち込んでいると、紅亜はしゅんとする俺を憐れに思ったのか、フオローの言葉を投げかけてきた。

「ち、違うよ？ 鷹太郎も見た目だけならカッコイイと思うよ？」

「じゃあ、なんで嫌なんだよ」

拗ねた調子で聞いてみる。

「あたしは、強い人が好きなの。あたしより強い人。あたしがピンチになっても、いつでも助けにきてくれる人。だから……」

「だから？」

「もし次にライオンの子、アレンだっけ？ が襲ってきたら、自分の力だけでアレンをやっつけてみて。それでもしやっつけることができたなら、期間限定で鷹太郎の彼女になってあげる」

んな無茶な。……でも、そうでもしなければ美虎に殺されてしまう。事実がばれて、八つ裂きだな。

人生最大の選択。ライオンに八つ裂きにされるか、美虎に八つ裂きにされるか。

間違った。ライオンと戦うか、美虎に殺されるか……ライオンだな、うん。

「分かった。ライオンは絶対、俺だけで倒してみせる」

言っちゃったよ。決意しちゃったよ。もう後に引き返せないよ。

紅亜はそれを聞くと満足そうに頷き、食器を片付けてリビングを後にした。

静かになった空間。

「……美虎よりは、生還できる率が高そうだし」  
無理やり納得する俺なのであった。

あ、結局まだ妹に「変態」って思われたままじゃん。

七、そんな素敵なこと兄さんは言ってません（前書き）

主な登場人物

- |                                       |                                   |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| ・ 藤谷 鷹太郎<br><small>ふじたに ようたろう</small> | ・ 藤谷 美虎<br><small>ふじたに みこ</small> |
| ・ 紅亜<br><small>くれあ</small>            |                                   |
| ・ 望月 典馬<br><small>もちつき てんま</small>    | ・ 笠井 蛍牙<br><small>かさい けいご</small> |

## 七、そんな素敵なこと兄さんは言ってます

翌朝、自分の部屋のベットで目が覚めた。

昨日ここで紅亜と並んでテレビを見ていた通り、部屋は元の姿へと戻っていた。紅亜による「熊猫族に伝わる空間限定時間回帰術」とかなんとかいう漢字の多い術のお陰だ。あいつはもう格闘家っていうより手品師だな。

「あらあ、ダーリン、おはようございますう」

と、そこで当然の如く俺のすぐ傍にいた妹が声を掛けてきた。つか、ベットに寝ていた。

「ダーリン言うな」

「何いつてるんですかあダーリン。昨日あんな熱烈なプロポーズしておいてえ。あ、返事がまだでしたねえゝすいませえん」

そういう問題じゃない。って、プロポーズ？……ああ、昨日のあれか。タイガーショックの。

「お受けいたしますう」

愛らしくにつこりと笑う美虎。その笑顔さえあれば大抵の男子はおとせるだろうに、勿体無い。

「結婚式はどうしましょうかあ？あつ、指輪も……」

世間のルールを色々と無視した事を話し始める。俺らは年齢的にまだ結婚できないって、一昨日そんな感じの話をしただろうが。

俺は無視するようにして顔を背け、部屋を出ようとする。

「あれえ、でも兄さんには彼女さんがあ……？……浮気……？」

あ、あら？ちよつと変な方向に想像が展開してません？

何度も言うが、タイガーショック……というか、妹に絶大な威力のショッキングな嘘事実をぶつけてその場をしのぐあの術は、大変危険な技なのだ。そう、諸刃の剣。

だが、よくよく思えばあの技に利点はないのだ。今日の自分を助け、明日の自分を見放す。つまり、ただ単に「今殴られたくないか

ら、次の機会に殴られることにする」。そういった技なのだ。

「兄さん、聞いてもいいですか」

きたー！超怒ってるよー！美虎さんマジ怒り心頭だよー！

口調がのつたりを脱出し、声が冷ややかな空気を纏う。デジャヴだ。前もこんなことあった気がする。

「は、はは……美虎さんは最近質問ばかりですなあーははは」

無理に口角をつりあげ笑みをつくろうとする。だめだ、不自然すぎ。

美虎さんその右手の構えはなんだいーそれは君がマツハパンチ三連打をするときの構えじゃないかいー落ち着いてーもちついてー。

「わか、分かりました、なんでも正直に答えます」

早口でそう述べる。美虎の右手から力がぬけていくのが分かる。助かったあー……いやいや、まだ早い。むしろこれからだ。

「兄さんと紅亜ちゃんは付き合っています。その事実、嘘、偽りはないですか？」

実際、お前に今まで言った事はほとんど嘘偽りなだけだなー。

なんてことは口が裂けてもいえない真実。

「ない……です」

ポーカーフェイスが苦手の俺。表情を作るのも一苦労だ。

「本当に？」

「本当です」

「では、決して紅亜ちゃんはおとしものなんかじゃありませんか」

「はい、決して紅亜ちゃんはおとしものなんかじゃありませんどうませんすい」

しまった！焦って語尾がおかしくなった！つかなんだよ「ありませんませんすい」て！潜水艦の名前みたくなってんじゃん！

恐る恐る視線を上へ。うわああの目無理ー絶対疑ってるよ。

しかも首を左右に傾けてゴキ、ゴキって鳴らしてる。……殺す気満々だな。

「兄さん、自分の体の部位で殴られても「痛そうで痛くない、少し

痛い部位」を教えてください」

桃屋の大ヒット商品か。

「ハート」

どうだ、これはさすがに殴ることはできないだろうと考えたのもつかの間、心臓のあたりをマッハパンチで打ち抜かれた。

「ぐべしっ」

そのまま後ろへ吹っ飛ぶ。デジャヴ、完全デジャヴ。

「では、紅亜ちゃんを兄さんの彼女ということを前提にして質問します。兄さんは昨日の夜20時37分29秒に、わたしにこう言いましたね。「美虎、お前は崖の上に咲く一厘の花だ。そんなお前に手を伸ばすのが怖くて、たとえお前を摘むことができたとしても、儂く散ってしまいそうで……。でも、俺はお前が好きなんだ！愛してる！……結婚してくれ。一生俺が崖の上にいることとなっても、絶対に離れたりはいしない。だから……。こんな俺の気持ち、受け止めてくれるか？美虎」って」

言ってねえー！完全には俺の告白偽装されてるー！つか時間こまかつ！

お、おち、落ち着くんた鷹太郎。こんなところで取り乱してどうする。

……にしても、そのプロポーズの言葉はいささか寒気を感じるな。気持ち悪い。……つか俺はそんなキャラじゃねえ！

でも……ここで「そんなこと言ってねえよバーカお前は日本語勉強しに幼稚園児からやり直せ」なんて言ったら……ふといくつかの漢字が頭をよぎる。殴、蹴、刺、血、死、食。

殴られて蹴られて刺されて血を流して死んで食べられる。待て、食べられるってなんだ。

「い、言いました。はい、確かに言いました」

そう言った筈なのに、美虎の冷笑は更に冷たさを増すばかりだ。何故だ、ちゃんと肯定したのに。

「そんな素敵な事兄さんは言っていないません。正しくは「俺は紅亜も

愛しているが、その何十倍もお前の事を愛しているんだ」です」

「うわー恥ずかしいー、と思ったのは俺だけではないようで、美虎もピンクに染まった頬に手を添え、照れるように目を逸らしていた。ならそんな事を威風堂々と言わないでくれ。あと素敵な事ってなんだ。」

「では、今一度質問をします。「俺は紅亜も愛しているが、その何十倍もお前の事を愛しているんだ」はわー！」

ついに恥ずかしさに耐え切れなくなったのか、美虎は奇声をあげてもとの美虎へ戻った。自爆タイガーショック。

「……を、いいましたよねえ、兄さん」

元に戻ったのはいいが、その口調だとヤンキーに脅されているようにしか聞こえない。

ここは念のため敬語でつなげよう。

「言いました。はい、確かに言いました」

さっき言った事を人形のように繰り返す。

「この言葉、深く考えるとお、紅亜ちゃんも愛しているが、わたしも愛してる。そういう別の意味合いで捉える事もできますよねえ？」

深く考えるも何も、そのまんまの意味なんです。こいつ、勉強の方では頭がいいのに、たまにぬけた事言うよな。まるで笠井みいだ。いや、笠井は生粋の天然か。望月は変態で。

「はい、そうですね」

タモリさんはいませんよー。

「……単刀直入に聞きますう。わたしと紅亜ちゃん、どっちを取るのですかあ？」

にこつ。まぶしい笑顔。まぶしすぎて顔も見れねえ……うん。

どちらを取る、と聞かれても俺はどう答えればいいのかわからない。当たり前だ。問題に答えがないのなら、回答者は自分の予想をあてることは不可能だ。

いつのまにか床に正座をしていた俺の手の甲に、うつすらと嫌な汗が滲み出てくる。紅亜の方を選べば、美虎は悲しむだろう。別に

今更、というわけにもいかない。家族なんだから。

……いや、家族だからこそ、か。まず恋愛対象に妹が入ってる時点でおかしいんだ。正気にもどれ、俺。

殴られようと、蹴られようと、俺は美虎と家族でいなければならぬ。それ以上はだめだ。

決心した顔で、俺はベットのの上に鎮座する美虎を見つめる。

「お……」

「あ、その前に言っておきますがぁ……」

遮られたー！おいちよつとかつこつけたのになんで遮るんだよー！  
いじけるように目を細めて美虎を見やると、淡々と、笑顔のまま、  
あいつはこう言い放った。

「わたしは家族も恋愛対象に入っていますしい、それに、兄さんの  
事が宇宙一大好きなんですよぉ」

その瞬間、なぜか俺の胸の鼓動が急速に早まった。え、おい、ど  
うしたんだ俺。今まで何度も「大好き」なんてありきたりな言葉、  
たくさん聞いてきただろ。おもに妹から。

というか、こいつ俺の考えを読んだな。

「そ、それがどうしたんだよ……」

それなのに、俺は動揺している。らしくない。妹相手に。まさか、  
俺もシスコンだったり？

んな馬鹿な！そんなことあってたまるか！

「いえ、ただ知っておいてほしかっただけです。では、先程の質  
問の返答を、要求しますう」

……いや、よくよく考えれば、それでいいんじゃないか？紅亜を  
選んだ所でこの状況が良くなるはずがない。ここはひとまず美虎を  
選んで……いや、そしたら後に引き返せなくなるかもしれない。

俺の頭の中は混乱するばかり。一体どうすればいい。美虎を選べ  
ば紅亜を彼女と言った事が嘘だとしても許されるだろう。あ、そし  
たらじゃあ紅亜は一体何者なんだってこんがらがって……おとしも  
の？そんなの通じるか。つか、おとしもの拾ったら交番に届けなき



や……あー、もういい!!

詰まるところ、俺が悩んでいたのは、「今の俺」を助けるか、「後の俺」を助けるかだった。

このまま考えても埒が明かない。俺は半ばヤケクソに口を開く。

「俺は……」

八、『今』の自分を見放せばいい！（前書き）

主な登場人物

- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| ・ 望月 典馬<br>もちつき てんま | ・ 藤谷 鷹太郎<br>ふじたに ようたろう |
| ・ 笠井 蛍牙<br>かさい けいご  | ・ 藤谷 美虎<br>ふじたに みこ     |

八、『今』の自分を見放せばいい！

「俺は……」

言葉を口に出そうとした、その時。

部屋に、一人の訪問者が。

「よーたるー。起きてた？」

軽やかなご機嫌ステップを踏みながら紅亜が俺の部屋にやってきたのだ。

タイミング悪っ！

紅亜は床に正座している俺と、ベットの上で正座している美虎を見比べて、「やってもーた」というような顔をした。へえ、お前そんな面白い顔できんだ……。――

「あの……しつれいしましたっ」

逃げ出す紅亜に

「待つてくださあい」

引き止める美虎。

うわーなんだこの状況。完全な修羅場だろ。

妻と浮気相手、夫はどちらを選ぶのか、みたいな。

「あう、はい……」

その浮気相手もなぜか正座をする。お前は別にどっしり構えてていいんだよ。

「今、兄さんにわたしと紅亜ちゃん、どっちを取るか聞いています」

紅亜は何を言われているか分からない様子。

「どっちと結婚するか、ということですよ」

いや違えだろ！俺は結婚を前提にしてプロポーズ（嘘）をしたわけじゃねえぞ！

ちらと隣に正座する紅亜の顔を窺う。今回はちゃんと状況を理解できたらしく、いきなり顔を赤くしたりはしない。

で、さっきの質問の返答か。美虎も「早く答えて」とこちらに目配せをしてくる。

……ほんと、朝から俺らは何やってんだよ。

「俺は、昨日言ったとおり、紅亜も美虎も好きだ。だけど、2人の好きは違う」

「……どういうことでしょうか」

美虎の表情は変わらない。

「紅亜に対する好きは、異性としての好きだ。だけど、美虎に対する好きは、家族、兄妹としての好きなんだよ。その2人の中から1人を選ぶなんてできない」

よく俺は真顔で好き好き言えるなあ。一休さんもびっくりだよ。

「それでは、昨日の告白う、あれは嘘なのでしょうか」

「いや、だから……」

「兄さんの告白の言葉はあ、紅亜ちゃんに対する恋愛感情よりわたしに対する恋愛感情の方が大きい、という意味にしか読み取れませんがあ？」

はあ？意味が分からない。という顔を俺はしていたんだろう。

そんな俺の表情を見て、美虎は今までのつくり笑顔を取り消し、怪訝な顔をした。久しぶりに見たな、あの顔。

「もう……兄さんなんていいですう。ばあーか！」

そついい残し、美虎は部屋を飛び出して行ってしまった。

その姿を啞然として見送る俺。

「鷹太郎は、馬鹿だよ」

ぽつりとつぶやく、紅亜。

「……なんで」

「はつきりしないから。どっちが好きかって聞かれてるのに、「家族だから」とか「兄妹だから」とか。美虎さんが聞いているのは、単純に「異性としてどっちが好きか」ってことなんだよ？」

そりゃ、分かってるけども。でも、家族を傷つけたくないから。

「傷つけたくないからって嘘で誤魔化してちゃ、ずっと苦しみから

逃げられないよ。それに、鷹太郎が本当に傷つけないと思ってるのは、自分自身でしょ」

自分自身。今の自分を助け、後の自分を見放す。でも、俺はずっと違反をし続けていた。

今の自分を助けて、嘘を利用して後の自分も助けていた。それが間違いだった。

「……はつきり自分の答えを美虎さんに言っ。そして、今の自分を見放せばいい」

……。

あの……そんな簡単に言いますけど、美虎さんの一撃は天へ旅立てるほどの威力を持っているんですよ？今の自分を見放せば、もう後の自分なんて存在しませんよ。きつと。

……でも、まあ。言っしかないか。正直な事。

「ってか、なあ」

いまだ隣で正座を続けていた紅亜が顔をこちらへ向ける。俺がそのままスムーズに美虎の元へ向かうと思っ。ていたらしく、虚をつかれたように首を傾げた。

「なに？」

「考えてみれば、美虎にお前の正体を正直に明かせば、全てまるく治まるんじゃないのか？」

一昨日の夜、美虎に「あの女は何者だ」と聞かれたとき、俺はどうせ本当の事を言っても信じてもらえないだろうと思っ。て「おとしもの」と答えた。結果マツハパンチを鳩尾に喰らう羽目になったが、あの時無理にでも美虎を説得していれば、こんな修羅場は展開されなかったはずなんだ。

「そしたら、美虎さんも巻き込むことになるけど」

巻き込む。またそれか。

「それ、前も不思議に思っ。ただけど。なんでお前の秘密を知ったぐらいでその相手を巻き込むことになるんだよ」

「……世界にとっ。てあたし達は、『異能者』だから」

紅亜はどこか寂しそうに、そう答えた。

「異能者は常識から省かれる存在。あたし達は、本当は世界に存在しちゃいけない人間なの。そんな『異能者』達の存在が世間に知れ渡ってしまったら、もうあたし達の生きる場所はなくなってしまう。だから力を持たない人間に、無暗に秘密を教え……ちゃ……いけな……い……」

世界に存在してはいけない人間。異能者。

そんなの悲しすぎるだろ。

いつの間にか隣の幼げな少女は俺から顔を背け、嗚咽をもらしていた。

それでも、続きを語ろうと少女は言葉を紡ぎだす。

「それに……もし秘密を知られた場合、知ってしまった人間は必ず殺さなければいけないって掟があるの。秘密を伝染させない為に……」

「じゃあ、なんで俺は生かされてるんだ？」

「……それは、秘密。ほ、ほら、早く美虎さんのところへ行ってきたよ」

しっしっ、と野良犬に「あっちいけ」をするように手を振っていく紅亜に後押しされ、俺は立ち上がった。

と、そこで背後から声が掛けられる。

「あ、今日は特訓するからね。よろしくー」

ちよっとそこまでコンビ二行ってくる、ぐらいの気軽さで。

……特訓で、何？



## 九、鷹太郎に9999のダメージ！（前書き）

### 主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・ 紅亜 くれあ
- ・ 望月 典馬 もちつき てんま
- ・ 笠井 蛍牙 かさい けいご



## 九、鷹太郎に9999のダメージ！

美虎はリビングルームのソファに体を丸めて泣いていた。

いつもは笑顔なだけに、泣き顔を見るとなんだか恐縮してしまう。

「美虎」

そつと名前を呼んでみる。美虎は涙をティッシュで拭い、またつくり笑顔を浮かべた。

「兄さん、いきなりすいませんでしたあ」

それはこっちのセリフだ、と思ったところで、口に出す事はできない。

どうやって言葉を繋げばいいのかわからないのだ。

「に、兄さんは昔から嘘ばかりですわねえ。しかもお、よりにもよってとても傷つく嘘ばかりでえ……」

鼻水をかんで、ティッシュをすぐ傍のごみ箱へ放り込む。

「……心の底では、分かってましたあ。兄さんが、わたしの事を好きじゃないことぐらい……でも、嘘だと分かっている、昨日の告白はとても嬉しかったんですよ」

俺は無意識に、家族を酷く傷つけていた。その事実だけで、胸が締め付けられる様に痛む。

「なんでいきなりあんな事を言ったのかは理解できませんが……嘘、なんですよわねえ？」

すがりつく様にこちらを見上げてくる妹。まだ心のどこかでは、認めていない自分がいる。それは美虎自身にも分かっているんだ。俺はその泣き顔から目を逸らしてしまう。その気持ちに伝えられないからだ。

「嘘……じゃない」

なのに、少しでもその気持ちに伝えようと俺は必死に言葉を頭の中から弾き出す。

「言い方を間違えたただけだ」

今から言う事は、嘘なんかじゃない。

「俺は紅亜を彼女として愛している。そして美虎を、家族として愛している」

今になってなんだ、俺は。今までずっと美虎をうざがってきたのに。

本当は、好きだったのかよ。

俺が言い終わると、美虎は自分に納得させるようにうなづき、ソファを立った。

泣き顔じゃない。いつものつくり笑顔でもない。

人間の本能からくる、そのままの笑顔だった。

「ふふ……そうですかあ。では、変態嘔吐きクス兄さんを許してあげましょあ」

あれ！？許してないよね！？つかなんで俺の想像通りの毒舌を吐いてんだよ！

「わたしも、愛していますよあ、兄さん」

につこりと自然な笑みを見せる。これでやっと、真正な家族としてこれから付き合っていけるんだな……やれやれ。

あれ、そういえばパンチがとんでこないな。蹴りも。ボディプレスも。何故だろう？

「異性として」

ボソツ、と美虎が呟く。え、今なんて言いました？異性？異性として？待て待て、さっきの美虎の発言と繋いでみよう。

「わたしも、愛していますよあ、兄さん……異性として」

なんも変わってねえー！なにが真正な家族だよ！うわ俺恥ずかしー！

一件落着と思ったらまた一件。結局、今の俺も、後の俺も助けられないのだった。

「たとえ相手が彼女だろうとあ、負けませんよあー！」

しかも気合入ってるし。だから、家族内で恋愛はないって。

その後、2階からリビングへと降りてきた紅亜も一緒になって、3人で朝食を摂ることになった。

「それで、兄さんったらねえ……」

美虎が意気揚々と俺達の小さい頃の思い出話を紅亜に聞かせている。

「温水プール上がった後で、水着から服に着替えるとき、シャツとパンツ間違えちゃってえ……」

「そんな失敗したことねえよ！」

こいつ勝手に思い出を偽造してやがる！

「あとあとお、中学生の時に、修学旅行で女子風呂覗いたりい……」  
な、なんで知ってるんだ……！まあ、失敗したんだけどさ。

「それとお、高校の入学式の最中に全裸になってステージの上でブレイクダンスを……」

「踊ってねえから！お前なんで勝手に俺を変態に仕立て上げようとしてんだよ！」

紅亜はどうやらそれを本当の事だと思っっているらしく、だんだん俺への目つきが「不審者を見る目」へと変化していつてる。勘弁してくれ、俺はそんな変態じゃない。変態は望月だ。

ちなみに今日は土曜日。学校へ通学する必要はないので、ちよつとイラッとするあのロリコンと目を合わせないで済む。おし、今日は家でゴロゴロしよう。

それなのに。

そのすぐ直後に、紅亜からこの休日を潰すこととなる命令が下る。

「じゃあ鷹太郎。この朝食を食べ終わったら、すぐ特訓ね」

特訓。そうだ、さっきそんな単語を紅亜の口から聞いた気がする。でも、一体何の特訓をするのだろうか。

「紅亜ちゃん、特訓って何をするんですかあ？」

当然の様に美虎が質問を投げかける。

「えっ。あう、それは、えーっとえー」

言葉に詰まる紅亜。何故だろう……と少し考えて、やっと俺は思  
い出す。

そつだ、またライオンが襲ってくる時のためにか。  
気づくと、紅亜が俺に目で助けを求めていた。俺は「適当に言え」  
と口の動きだけで伝える。

紅亜はそれを読み取ると頷き、大声で、

「な、ナンパ！ナンパの練習！」

と宣言した。

馬鹿だ、こいつ馬鹿だ……なんで彼女が彼氏の浮気を手伝うんだ  
よ。

あ、なんか体が冷えてきた。なんでだろ、ははっ。

気づけば、いつかの氷点下の眼差しがこちらへ向いていた。

「兄さあん、ハーレムはお好きですかあ？」

「はは、何を言うんだみこちゃん。僕は心に決めたじょせつづぶえ  
っ！」

美虎さんお得意ボディプレス炸裂！鷹太郎に9999のダメージ！  
いやもうダメージが最高値じゃん……ああ、だめだ、意識が……

最後に、望月にかわって言わせてくれ。  
ハーレム、万歳。

九、鷹太郎に9999のダメージ！（後書き）

まだ終わってないですよw

十、熊の博士は大志を抱く（前書き）

主な登場人物

- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| ・ 望月 典馬<br>もちづき てんま | ・ 藤谷 鷹太郎<br>ふじたに ようたろう |
| ・ 笠井 蛍牙<br>かさい けいご  | ・ 藤谷 美虎<br>ふじたに みこ     |

## 十、熊の博士は大志を抱く

「鷹太郎、死んでる？死んでるよね？」

かすかに、幼げな少女の声が頭上から聞こえる。天使？いやまさか。

瞼を徐々に開いていくと、目の前には美少女の心配そうな顔があった。

「なんだ、紅亜。お前も死んだのか」  
額にデコピンをされる。

「いたっ」

「そんなわけないでしょお。ほら、早く起きて。特訓始めるよ」  
紅亜は呆れるようにそう言つと、立ち上がって俺の視界からはずれた。

あたりを見渡す。遊具が錆びたブランコと滑り台しかない、廃れた雰囲気の小さな公園。ここは……天月公園？なんで？

体を横にしていたベンチから頭を上げると、なにやら体のあちこちが痛む。ああ、美虎にボディプレスを食らったんだった。……いい加減、もうこれ以上の臨死体験は勘弁してもらいたい。

「こっちこっち」

俺の前にはじめて現れたときと同じ、朱色の着物を着た紅亜が手で招いてくる。

「あー分かったよ。待てって」

仕方なくベンチから立ち上がり、紅亜の元へ向かう。天気は曇り空。今にも雨が降ってきそうな雰囲気だ。なんかテンション下がるなあ……。

「じゃあ、今から特訓をはじめます」

……。

「そつ、そこはいえーい、でしょ！」  
いや知らんけども。

「じゃあ、今から特訓をはじめます」

「いえーい」

「声が小さい！はいもう一回！」

「コホンと小さく咳払いをして、

「じゃあ、今から特訓をはじめみや……」

「噛んじやったよ。てかどんだけ特訓はいるのに時間かけなきゃいけないんだよ。」

「……はじめます！礼！」

「え、あ、おっお願いしまあす！」

「なんで試合みたいになつたんだ。審判か君は。」

「よしおっけー！じゃ、今からやることを説明するね」

黙って頷く。紅亜は依然としてはりきっているようだが、俺はやつぱりどうにも気乗りしない。

でも、こいつを彼女にするためには、ライオンを一人で……死ぬんじゃねえか？俺。

「ちよつと！聞いてよ！」

ぼんやりしていた俺に紅亜から喝が入る。

「聞いているよ」

「……むう。で、今からやるのは、熊猫族の基本となる武術「舞爛拳」の練習。お手本を見せるから、それを真似してね」

そう言つと、紅亜は以前やった風鈴のような音の鳴る指パッチンをする。すると、前とは比べ物にならないほどの大量の黒い煙が出現し、徐々にその奥から巨大なシルエツトが姿を現していく。

黒煙が晴れた先にいたのは、熊だった。そう、かなり巨大な熊さん。つか、この大きさはありえない。全長5メートルほどある。

「よく見て、真似するんだよ」

すると紅亜も、黒い煙と共にパンダに変化する。それから間も置かず、目にも留まらぬ速さで巨大な熊へと走っていくその様は、まるで勇猛果敢な騎士のようだ。

一方熊の方もこちらへ向かってくる白と黒の生命体に気づき、右



手を上へ挙げて攻撃の態勢をとる。

紅亜の奴、真正面から突進してるけど大丈夫なのかあれ。あんな熊にぶん殴られたら、大怪我じゃ済まされないぞ。

だが、そんな心配は必要なかった。紅亜は熊の右手が振り下ろされると同時に、突如その場から姿を消し去り、次の瞬間には熊が鈍い悲鳴をあげて前のめりに倒されていたのだ。

一体、何が起こったのかわからなかった。何今の？なんで姿が消えたの？マジツク？

人間に戻った紅亜は別に喜びを表情に浮かべるわけでもなく、「こんぐらいできてあたりまえでしょ」とでも言いたげな顔をしていた。えー、マジで。

「今のが舞爛拳。相手が攻撃を仕掛けてくる直前のタイミングで背後に回りこみ、強烈な一撃を叩き込む。回り込み、叩き込む。分かった？」

「理屈は分かるけど、そんなの人間の俺には無理だろ。なんだ、その……フランケン？」

ぶらんけん  
「舞爛拳！」

「つていうの。つつか、あんなのがこの公園に居たら、その内大騒ぎになるんじゃないか？」

俺は紅亜の後方に倒れている巨大な熊を指差す。

「だいじょぶだいじょぶ。あの熊、あたし達にしか見えないから」

じゃあなんだ。道行く人には、一人で格闘ごっこをしているただの痛い人に見えるのか。俺が。

「ほら、やるだけやってみよー！」

ノリノリで腕を掲げる紅亜。そんな簡単に言わないでくれ。幾度の死線を乗り越えてきた俺でも、さすがに熊さん相手はキツイだろ。……ちなみに、あいつには触れるのか？」

「え？何言ってるの。そうじゃなきゃ倒せないでしょ？」

ま、そりゃそうか。自分は触れるけど、あちらは触れない、みたいな都合の良い設定を期待してたんだけど。

「……まあ、いつか」

やるだけやってみればいいか。どうせピンチになれば、あいつが術とか使って助けてくれんだろ。きつと。

「じゃ、再始動開始！」

紅亜がはつらつな声色でそう叫ぶと、うつ伏せに倒れていた熊が突如起き上がり、素早くボクサーの様な構えをとってきた。おい待てや！さっきよりもバージョンアップな熊さんじゃねえか！

びびり気味の俺を見兼ねて、紅亜は気休めの言葉をかけてくる。

「だいじょぶ、こつちが攻撃をしかけてこない限り、クマーク博士は何もしてこないから」

「嘘つくな！クマーク博士すり足でどんどんこつちに近づいてきてるぞー！」

ずつ、ずつ、と砂を巻き上げ近づいてくる博士。恐怖で体が震える。鼓動が跳ね上がるように回数を増す。

それでも、大丈夫、大丈夫と自分に自己暗示をかける。次に戦うのはライオンだ。体躯ばかり大きいだけの熊なんかにびびってられるか。

一步、足を踏み出してみる。すると、自然に二歩、三歩と歩みを進めることができた。もう……このまま突っ切れえ！！

「うらああああ！」

恐怖に体が支配されることを恐れ、大声を出してクマーク博士へと走っていく。今更だけど、クマーク博士って絶対パクっただろ！天候はどんより曇り空からなんとまさかの晴れ。そのお陰か、俺のテンションもいつの間にか最高潮だ。

クマーク博士まであと3メートル、というところで先手の攻撃を打ち出してきたのは、やはりあちらだった。大木のように太い腕が俺目がけて襲いかかってくる。すかさず左へ飛んで攻撃を避けようと試みたが、やはり遅かった。右腕に強烈な重さのしかかり、骨が悲鳴をあげる。巨大な拳から伝わる感触に、吐き気がするほどの不快感を覚えた。

俺はそのまま前転をするようにクマーク博士の横へ飛び、距離をとって態勢を立て直す。右腕はかろうじて俺の胴体にくっついてい  
るような状態で、まったく力が入らない。脱臼、もしくは骨折か。  
痛みに顔を歪めながらも、ちゃんと状況を整理するべく頭をフル  
回転させる。

クマーク博士のジャブ、思ったより全然早いぞ。しかも、重い。

……だが、近づかなきゃダメージは与えられない。タイミングさえ  
計れば、なんとか避けられる可能性はあるが。」

ぶらんけん  
舞爛拳だか腐乱拳だか知らないが、あれは元々そこらの人間には  
無理な武術だ。

だが、それを応用した違う方法なら、俺でもできる……と思う。

紅亜へ目をやると、腕を組んでじつとこちらを見据えていた。色  
々期待してただけど、助けてはくれなそうだな。

俺は先程と同じ、すり足で近づいてくるクマーク博士に視線を戻  
す。

さっき見たときより、怖く感じてしまう。実際に怪我を負ったか  
らだろう。

でも、逃げたいとは思わない。

「覚悟しろやクマアアアク！」

震える声で自身を鼓舞し、震える足で地面を蹴り上げる。

クマーク博士は依然ボクサーのように両手を胸の前で構えたまま。  
その状態から、腕が伸ばされる瞬間。そこが狙い目だ。

全速力でクマーク博士との距離を縮めていく。5メートル、4メ  
ートル、3メートル……。

だが、そこで予想外の問題が生じた。クマーク博士がなんと、足  
をチャリダーのように天へ向けて振り上げてきたのだ。かかと落  
としの構え。

うわマジかよ！やばい殺される！

……などと焦る必要はなかった。むしろよろこぶべき状況になっ  
たのだから。

俺はすぐさまクマーク博士の股の下を飛び込み前転で潜り抜け、相手の背後をとった。

右手は使えない。左手は威力が弱い。  
なら、足を使うまでだ！

「くたばれ博士ええええ！！」

俺は全体重を左足におき、渾身の一撃となる右足の蹴り上げを、クマーク博士の股間に叩き込んだ。

そもそも熊にとって股間が急所であるのかは分からなかったが、一か八かだ。

……………。

沈黙。

恐る恐る顔を上げてみれば、クマーク博士は俺の顔を見つめ、「え？今なにかした？」とでも言うように呆けた表情をしていた。

頭の中に、ベートーベンの「運命」が流れる。てててーん。

だが、そんな絶望もすぐ消え去った。

ここへ現れ出たときと同じように、風鈴のような指パッチンの音でクマーク博士は黒い煙に包まれたのだ。

煙が晴れたところには、先程の巨大な熊はもう居なかった。

「鷹太郎！いえーい！」

その代わり、そこには紅亜が笑顔で立っていた。ハイタッチを要求してきたので、それに素直に応える。

「まさかクマーク博士に一撃叩き込めるなんて！見直したよ！」

「なんかその口ぶりだと、俺がボコボコにされるのを予想してたみたいなんだけど…………」

実際、右腕が重傷なんだけどな。

「まあね。鷹太郎がボコボコにされて、降参するまでやろうと思ってたから」

「はあ…………そんな特訓何のためにもならないだろ」

「何言ってるの！これで鷹太郎も『股蹴り』っていう新技を覚えたでしょ！」

あー……もうどうでもいいや。早く帰って休みたい。つか、右腕痛い。

「なあ、じゃあ特訓は成果があった、って事でいいんだよな」

紅亜は満足気に頷く。

「まあそうかも」

そうかもってなんじゃい。

「なら頑張った俺の願いを聞いてもらえないか」

「えー……うーん、別にいいけど。……あつ、ち、ちゅーとかはだめだよ！それ以外！そーいうの以外！」

そんなの頼むかよ。いや、頼んでしてくれるのなら喜んで頼むけど。

「そうじゃなくて……お前今日ここに来るときに、どうやって意識のない俺を運んできた？」

「え？背中に乗せてきたけど、それがどうかしたの？」

乗せてきた、というのはパンダの状態のことだろう。それなら「じゃあ、帰りも俺を乗せてくれ。まさかこの後も特訓が続くなんてことはないだろ？」

人の目がある街中を、パンダの背中に揺られながら家へと帰る少年。

以前は落ち着いて乗っていられないほどのスピードだったが、今回は時間をかけて、ゆっくりと道を進んでいる。

ああ……心地良い。もうずっとこのまま揺られていたい……。

まあ当然ながら、そんな俺の願いは叶わないわけで。



十一、獅子の襲来（前書き）

主な登場人物

- ・ 藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・ 藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・ 紅亜 くれあ
- ・ 望月 典馬 もちつき てんま
- ・ 笠井 蛍牙 かさい けい

## 十一、獅子の襲来

「ひひつ、見つけたア！」

頭上から少年の声を認識した瞬間、俺の体は宙に浮き、道路に叩きつけられていた。

背中に鋭い痛みが走る。苦痛に顔を歪ませながら、俺は頭を持ち上げて道路の先をみつめる。

そこには一人の少年がいた。身長は俺より少し低いぐらい。褐色の肌に翡翠色の瞳、明らかに日本人ではないだろう。

紅亜は俺の前に立ちふさがり、少年を威嚇するように唸る。

「なんだ、またおめえかよ。昨日はよくもやってくれたなア」

少年は露骨に嫌そうな表情をした。どうやら、この少年が紅亜の話していた『獅子族のアレン』という奴らしい。思ったより小さかったな。

「またあたしにやられにきたの？」

アレンに対して挑発的な言葉を発する紅亜。

「アンタに用はねエ。今日はその後ろの奴に用があつてきたんだ」俺に用、ですか。絶対ロクな用じゃないだろ。

紅亜はちらと後ろの俺を見やり、それから前へ向く。

「決闘でもしにきたの？ だったらまたこんどにして」するとアレンは高らかに笑い、

「決闘？ ちげエちげエ！ ただそいつを殺しにきたただけだ！」

こ……殺しに？ 俺を？ 何故そんなこと思いつたのですか君は。

そんな俺の視線に気づいたのか、アレンは顔をこちらに向け、

「この胸糞悪イ戦<sup>いくさ</sup>を終わらせるためだ。そん為には、テメエを殺さないといけねエンだよ」

いやなんで！？ 戦を終わらせるためになんで俺が犠牲になんの！？……まさか、生贄？ 俺を動物の神やらに捧げるとこの戦争が終わるの？……んな馬鹿なことあるか！



「自覚がねエみたいだから……殺すのは簡単そうだなア」

自覚……？まあ良く分からないが、そりゃ簡単だろうよ。人間だもの。

紅亜はそうはさせまいと少年に向かって再び唸ってみせる。

「鷹太郎には指一本触れさせない！」

だがアレンは依然として余裕の表情だ。

昨日やられたばかりの相手だというのに、何故こんな顔ができるんだ？

その答えは、すぐに分かった。

「熊猫の相手はオレじゃねエ。……お前ら、出て来い！！」

アレンがそう号令をかけた瞬間、激しい土煙が紅亜の前に5つ出現し、それぞれの煙からライオンが一匹ずつ姿を現した。

「さアお前ら！その熊猫<sup>パンダ</sup>を噛み殺してやれ！」

その言葉に答えるように5匹の獅子は天に向けて咆え、紅亜目掛けて襲いかかってきた。

撒き沿いになりたくないの、俺はすかさず横へとび回避する。

……いや、このライオン達、俺は眼中にないようだ。こちらを見向きもしない。

「さアて。じゃ、殺りますかア！」

アレンの声。刹那、俺の右腕が体から離れる。

食い千切られたようだ。ライオンとなったアレンに。速すぎだろ、あれ。動きがほとんど見えなかった。

「……ちっ、超速硬化か。熊猫め……」

俺の後ろでアレンが憎げに声をあげる。そう、俺が腕を食い千切られても平気でいられるのは、紅亜の『超速硬化<sup>ちようそくこうか</sup>』という術のお陰だ。クマーク博士との死闘の後、紅亜に「念の為」といわれてかけてもらったんだ。

肉体の切断された部位を瞬間的に硬化させるので、痛みも出血もない。

が、この術はあくまで切断にしか対応しないらしく、打撃を受け

たら普通に痛みは感じるらしい。

アレンもその事については知っていたようだ。後ろを振り向くと、ライオンから少年の姿に戻っていた。

「獅子の体よりこっちの体の方が殴りやすいからな。覚悟しろよ」

アレンは殺気に満ちた瞳をこちらに向け、胸の前で腕を構える。本気で俺を殺<sup>や</sup>る気のようなのだ。

それに負けじと俺も左腕を胸の前に構える。そして、アレンの顔をにらみつけ虚勢を張る。

横幅3メートル程の狭い道路。背後ではライオンの悲鳴が聞こえる。紅亜が頑張っているようだ。

ならば、俺だって。

前方5メートルのアレンの下へ駆けていく。一方あちらはファイティングポーズのまま微動だにしない。くそ、なめやがって。

俺は勢いをつけた脚で残りの距離を一気につめ、左拳を少年の腹に叩き込んだ。

……はず、なのに。そこに少年の姿はなかった。

「っ……っ？」

呆けたのもつかの間。背後に殺気を感じたときにはもう遅かった。後ろを振り返る事さえ許されず、俺はハンマーにでも殴られたかのような衝撃を背中に受けて、吹っ飛ばされていた。

「知ってるか、これ。舞爛拳っていうんだぜエ。相手の隙を突いて背後に回りこみ……」

「強烈な一撃を叩きこむ、だろ……」

自慢げに話すアレンの言葉を遮り、俺はどうにか立ち上がる。背骨はまだ生きてるみたいだが……

勝てそうもねえぞ、これ。



## 十二、天空からのエマルノス（前書き）

### 主な登場人物

- |   |                                       |
|---|---------------------------------------|
| ・ 藤谷 鷹太郎<br><small>ふじたに<br/>クレア<br/>ようたろう</small> | ・ 藤谷 美虎<br><small>ふじたに<br/>みこ</small> |
| ・ 紅亜<br><small>もちづき</small>                       |                                       |
| ・ 望月 典馬<br><small>アレ<br/>てんま</small>              | ・ 笠井 蛍牙<br><small>かさい<br/>けいご</small> |
| ・ 吾煉  |                                       |

## 十二、天空からのエマルノス

吐き気を必死に押さえ込み、前方に仁王立ちする少年に目をやる。  
「さつさと死にやあいいのに。オレに本気ださせたら、ただじゃ済まねエぞ」

ただじゃ済まない、ってそりやあたりまえだろ。そっちは殺す気満々なんだから。

「それとも、なにか。オレを倒せるとでも思ってたのか？」

嘲笑うようにアレンは身を屈めて立っている俺を見つめ、挑発的な言葉を投げてくる。

今のところ、正直全く勝てる気がしない。

動きもほとんど見えないし、一撃が凄く重かった。

……だけど、まだ挫けるのには早い。

「……思ってるに決まってるんだろ」

倒さないといけないのだ。紅亜の期間限定彼氏になる為だけでなく、この場をどうにか逃れる為に。

アレンは馬鹿にするように鼻で笑う。

「その体たらくで言えることか？」

「こんぐらい、大した事じゃねえし」

強がってみるが、所詮空元気だ。立ち上がることは出来ても、膝が鉛のように重く感じて前に進めない。疲労ではなく、恐怖のせいだ。

「へエ、そうかいそうかい。ンじゃ、ここで本気だすかなア」

満面の笑みで、こちらに歩み寄ってくるアレン。まるで美虎のようだな……恐ろしい。

俺は老婆のように腰を曲げた状態で後ろへ下がる。背中はずっ直ぐにも伸ばす事は出来そうだが、万が一それで背骨が使い物にならなくなったら困るから、この姿勢なのだ。

「金剛に輝きし双眼は……常に覇道の末を見つめている……」

突如、アレンは口元を小さく動かしながらなにやらブツブツと呟  
やきはじめた。

なんか魔法使いが強力な呪文を唱えてるみたいですよっけえ怖いん  
だけど！

「ちょ、まつ、それなに！？なにすんの！？メテオとか呼ぶんじゃ  
ねえぞ！」

「あん？メテオってなんだ。今から呼ぶのは」

その言葉を遮るように、町中に響くほどの甲高い咆哮が俺の鼓膜  
にとどいた。

「オレ、<sup>アレン</sup>吾煉の相棒、エマルノスだ」

エマルノスといえば……確か、紅亜の話で聞いたライオンの名前  
だ。

俺はどこから来るのかと警戒しながらあたりを見渡す。住宅の影  
からでてくるのかもしれないし、空から翼で飛んでくるかも……つ  
てそりやもうライオンじゃねえよ。グリフォンだ。

「……？」

あれ、なんか地面揺れてない？……まさか。

「地面から、とか？」

土を掘るライオン？エマルノス最強だな。紅亜に続いてテレビに  
出れるぞ。

客観的な感じでそう思っていたが、よくよく考えれば……俺、危  
なくないか？いや考えなくても危ないだろ！

そう気づき始めた頃で、いきなりアレンが空へ向かって叫ぶ。

「エマルノス、おいでエー！！」

そんな気持ち悪くも可愛らしい号令と共に、天空から金剛に輝く  
未確認生命物体が落下してくる。

なに！？やはり空からライオン……あれ？違う。

……わお、グリフォン。

「次から次へと変なのばかり……」

口ではそう言ったが、俺は人生初の伝説の獣をお目にかかれて、

かなりテンションが上がっていた。

「うわー、携帯家に置き忘れちゃったよー。とってこようかな。どうしようかな。」

そんな俺の考えを余所に、空中で速度を落としたグリフォンは華麗に地面に着地し、アレンの傍にその巨体を下ろす。

「つか、紅亜。なにがライオンだよ。思いつきり翼生えてるし、頭もどう見ても鳥っぽいじゃん。」

「よしよしよし、エマルノス、いい子だ」

アレンはその巨体に恐れる事は当然なく、猫なで声でグリフォンの背中を撫でている。

羨ましい。

「な、なあ、俺にも触らせてくれよ」  
「つついお願いしてしまった。」

するとアレンは翡翠色の瞳でこちらをにらみつけ、

「お前エなんかに触らせるわけねエだろーか。それに、エマルノスは俺以外の人間は絶対に好かない。お前エがこの美しい毛に触ろうとすりゃ、たちまち体を引き裂かれんぞ」

脅すようにそう言い放つ。

引き裂かれる、か。それなら別にいいや。どうせ体のどこを裂かれても紅亜の術で硬化されるからな。

「じゃあ、遠慮なく」

何気に話がかみ合っていないが、俺はお構いなしにグリフォンの元に寄り、左手をその背中に伸ばした。

グリフォンは紺碧の色を放つ瞳でこちらを一瞥する。が、何もしてこない。

そのままグリフォンの背中に触れる。ふさふさして気持ちいい。普通に猫とか犬を触る感触と似ている。

一方グリフォンの方は反応なし。

「な……なんだとオ……!？」

反応があったのはアレンの方だった。驚きに目を見開き、俺を直

視している。

「なんだよ。こいつに触り飽きたら、絶対……」

ぶん殴ってやるからな、と言おうとしたその時。

突如グリフォンは翼を広げて立ち上がり、俺の背中に自分の頭を押し付けてきた。威嚇、ではなさそうだが……なんだこれ。

アレンはその光景を見た瞬間、魂が抜けたように白目をむいて倒れた。

気絶、しているようだ。

……え、いや、だからなんで!?



十三、あ、間違った。どうでいーん倍！（前書き）

主な登場人物

ふじたに

・藤谷

鷹太郎

ふじたに

・藤谷

美虎

もちつき

・紅亜

てんま

かさい

螢牙

アレン

・望月

典馬

かさい

螢牙

十三、あ、間違った。どうでいーん倍！

いきなり気絶したアレンをただただ見下ろしていると、後ろから少女の声がかかる。

「わお、死んでる」

いや死んでねえよ。白目剥いてんだろ。

「これ、どうする？」

まるで誤って人を殺した奴みたいにな、俺は紅亜の顔に助けを求め  
る。

「埋めるか、食べるか？」

「だから死んでないって。気絶しているだけだ。つかこれ食べれん  
のかよ、お前」

紅亜は不気味なほどの笑顔をこちらに向けると、

「火で炙らないと無理だけどねっ」

と言った。お前はどこの原住民族だ。

「ここに置いてくとまた襲いにきそうだしな……」

だからといって殺すのも俺には出来そうにない。それに、こいつ  
になんで俺を狙っていたのかを聞かなければいけないし。

「じゃ、持って帰る？」

「……しか、ないだろうなあ」

不本意だが仕方がない。家に着いたら縄で縛っておこう。

「で、こいつの方はどうしようか」

俺は隣に鎮座するグリフォンを指さした。

「わあ……昨日の変なライオンだあ……」

少年のように目を輝かせながら、紅亜はグリフォンの頭に手を伸  
ばす。

が、グリフォンは嫌がるようにその手を避けて、一心に「触るな」  
と紅亜を睨みつけてくる。

「ライオンじゃない、グリフォンだ。上半身が鷹で、下半身がライ

オンの」

話を聞いていない。紅亜はグリフォンの体をまじまじと眺めている。

その頭にチョップをいれ、こちらを向かせる。

「あうゝ……いたあ……あ、だめだ、頭蓋骨がもうだめだ。鷹太郎のせいだゝ」

わざとらしく頭を押さえて痛がる紅亜。なんか小学生の女の子みたいで可愛いな。

……あ、違うよ？ロリコンじゃないからね？ロリコンは望月一人で間に合ってるから。

「……こいつも家に連れてくか」

俺はグリフォンの頭に掌をのせる。先程と同じく、全く抵抗なし。むしろ喜んでいるようにも見える。

紅亜だけ個人的に嫌われているのだろうか。

「あたしもそれがいいと思うけど……餌代は？」

いやそんなずっと飼いつづけるつもりはないから。せいぜい明日にはもうお空に帰っているだろう。

「お前の餌代でもう手一杯だ。さ、帰るぞ」

紅亜は道路の真ん中で転がるアレンをグリフォンの背中に乗せ、歩き出す。

「ちょ、ちょっと待て紅亜」

ひとつ問題が。

「なに？」

「……もっかい、背中に乗せてくれ。足が上手に動かん」

「鷹太郎もお爺ちゃんになったねゝ」

「馬鹿言っな、もうクマーク博士の時点で満身創痍だったんだよ」

只今自宅の寝室、ベッド上。俺は横になり、紅亜から治療を受け

ている。

アレンに切り裂かれた、というか食いちぎられた腕を修復してもらっているのだ。

紅亜は俺の右肩に手を置き、そのまま特にアクションもなく、じっとしている。紅亜曰く、「昨日の部屋をもとに戻した時の術と似たような術を使っている」と言っているが……よくわからない。

「なにが「アレンすつごく弱かった」だ。並みの高校生からしたら世界チャンプと戦っているようなもんだよ」

第二次動物大戦とやらであいつは俺を殺しに来たらしいが、結果俺は助かってしまった。つまり、また俺を狙った刺客が来るかもしれないのだ。

気が遠くなるな……。

「だ、だって……本当に弱かったんだもん。あたしは「神拳兄妹」のなかでも一番格闘技苦手なのに、そのあたしよりも弱かったから

……」

申し訳なさそうに目を伏せる紅亜だが、なんだ、神拳兄妹で。

「神拳兄妹は、熊猫族で『最強』の呼び名をもつ兄妹のことだよ。

長男の宇藍、長女の橙香、次女の紅亜、双子の琉歌、琥珀。みんな格闘が得意なのに、あたしだけ苦手なの」

どこが？と心底思ってしまう。

「お前で弱いなら、長男の宇藍とかいう奴はどれだけ強いんだよ」

「宇藍お兄ちゃんは、多分熊猫族の頭領、あたしのお父さんよりも強いよ。それに、産まれた時から『碧き鬼神』って呼ばれてたらしいし」

碧き鬼神……いやバンダだろ？碧き熊猫だろ。待て、青きパンダ？それじゃ動物番組にまたまたスターが生まれてしまうじゃないか！そんな自身の葛藤はさておき、宇藍か。できれば敵にまわしたくない相手だな。

もしそいつがシスコンだったら、迷いなく俺は殺されるだろう。

「具体的に、宇藍の強さはアレンの何倍ぐらいだ？」

念の為に聞いてみる。人それぞれ特徴があるから比べにくいかもしれないが、そこだけは聞いておきたかった。

「え……う……どばぁーん倍！」

できれば数字で。

「あ、間違った。どうでいーん倍！かなっ！」

できれば日本語で。つか、どうでいーん倍ってなんだ。どばぁーん倍もそうだが。

「まず、あんな焦げた男の子とお兄ちゃんを比べるなんて失礼だよ！お兄ちゃんはすっごくカッコイイんだからね！」

焦げた男の子で。ちゃんと名前で呼んでやれよ。

「ほら、治ったよ！」

少し怒り気味な紅亜にそう言われ、はっとして俺は自分の右肩に視線を落とす。

何もなかった空間に、俺の右腕が存在していた。

おお、すげえ。もとに戻った。

「……お兄ちゃんなんかいつもクールで、すっごくすっごく強くてそれでいてみんなに優しく……鷹太郎とは大違いだよ」

失敬な。……が、確かにそのとおりだった。俺は基本的にみんなと群れるのを好む性格だ。クールとは縁もゆかりもない。それと、運動神経もそれほど良いとは言えないし、自分を優しいと思った記憶があまりがない。

……なんか悲しくなってくるから、やめようか。

落ち込んだ表情から俺の心境を察してか、紅亜はすぐにフオーするように笑顔をつくる。今はその笑顔が痛いのだ。つか自分から言っておいてなんだ。

「よ、鷹太郎もいいとこいっぱいあるよ！ホットケーキ焼いてくれたり、ホットケーキ……ホットケーキ……ホットケーキ……焼いてくれたり！」

ホットケーキ焼くことしか俺の長所はないのかよ！つか、それは長所じゃなくてむしろ使命だ！

「あつ、そうだ。そういえばさ、鷹太郎」

さらに落ち込んだ俺の顔から目を背けるようにして、紅亜が言うてくる。こころなしか、顔が赤い。

「なんだよ」

「……なんか茶色いの、結果的に、倒したでしょ？」

は？茶色いの？……ああ、アレンか。

もう名前はすっかり忘れてしまったようだ。……にしても茶色いのはあんまりだろ。

「倒したっていうか、自爆したけど」

勝手に気絶な。

「でっ、でも、倒したんでしょ？」

「まあ、……一応？」

こいつは何が言いたいんだ。そんなにアレンを倒して欲しかったのか？

「じゃああ……彼女に、なるね」

唐突に、紅亜はそう言い放った。

………彼女？

「なんで？」

ベットから上半身を浮かし、俺は首を傾げる。

「わ、忘れたの？もし鷹太郎が焦げを一人で倒したら、戦争が終わるまで彼女になってあげる、って」

焦げに関しては言うまでもなく……あー、そうだったな。さつきまで覚えてたのに、疲労で記憶がどっかに吹っ飛んだ。そういえばそんなのあったな。

「強い人が好き、って言うてたのに。いいのか？本当に」

少しいじけていた俺は、反発するように言う。

待て鷹太郎、もし「じゃあ彼女やんなーい」って言われたらどうするんだ。

「だっ、だからあ……」

だがその考えとは裏腹に、紅亜は甘えるような声でそうつぶやい

て、俺の体に腕を回す。

は、はい？なんで？

「鷹太郎は……強くないけど……」

紅亜の腕に力が入る。

「クマーク博士とか、ライオンとかに……本気で立ち向かう姿が、その……かつこよかったからあ……」

顔を真っ赤に染めて、抱きついてくる紅亜。

……あの。

何故いきなりデレる、紅亜。

#### 十四、多重人格の少女（前書き）

主な登場人物

・藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう

・藤谷 美虎 ふじたに みこ

・紅亜 もろつぎ

・望月 典馬 アレン てんま

・笠井 蛍牙 かさい けいご

・吾煉



#### 十四、多重人格の少女

「鷹太郎お……」

少女の少し艶っぽい声。シナモンのような甘い香り。汚れない白い肌の感触。それが、紅亜の体から直接伝わってくるのだ。

当然、胸の鼓動が急速に早まる。アレン戦の時よりも非常事態かもしれない。

「ど、どう、した紅亜」

いきなりの紅亜の豹変ぶりに、動揺して舌が上手にまわらない。

一体全体どうしたのか、全く状況が理解できない。何故いきなりデレデレしはじめるんだ。

いや、もしかしたら……。

最初から俺に惚れていて、それで、今になってやっとその素顔を現したとか……。

そんなしょうもない期待を胸に抱いた頃、突然寝室の扉が開け放たれる。

扉の外にいたのは、先程紅亜によって縄跳びの紐でぐるぐる巻きにされたアレンだった。

「おう、まだ真昼間だぜエ。そーいうのは夜からにしなア」

アレンは性の悪い笑みでからかうように言ってくる。

「別にいつでもいいじゃん……」

真っ赤な顔で紅亜がそれに抗議。

「というか、誰なの？」

「アレンだよ。お前がさっき言ってた『茶色いの』だよ。最終的には『焦げ』になったけど」

アレンはその紅亜の態度を見て、「ほう」と喉を鳴らした。

「……その熊猫の女。『多重人格者』だな」

「は？多重人格者？」

なんか、いきなりとんでもない秘密がカミングアウトされたな。

多重人格者といえば……確か、一つの体にいくつも的人格をもった人の事じゃなかったか？

「雰囲気をよく見りや分かる。こいつ、そんなやつかいなやつだったのかよ……ちッ」

「？……なんで多重人格者だと厄介なんだよ」

やけにフレンドリーになったアレンにやや不信感を覚えつつ、俺は睨みをきかせながら問う。

「動物の力を持った『多重人格者』は、例外なく『最強』ツつわれるんだ。おめエ、神拳兄妹って知ってるか？」

「紅亜の兄妹のことだろ？」

「おう、そうだ。あの兄妹が『神拳』なんつー大層な名がつけられてんのは、その兄妹全員が『多重人格者』だからだ。話に聞いてたからまさかとは思ったがア、こいつが本当にあの『紅亜』だったとはなア」

しみじみといった様子でアレンは息をつく。話に聞いてた、というところに引つ掛かるが……まあ、後で聞けばいいか。

俺は未だにひつついている紅亜に視線をやった。こんな小さな少女が、最強。

確かに、ここ数日の活躍を見れば、その事実には簡単に頷ける。

「並みの異能者が変化した動物より、多重人格者の異能者が変化した動物の方が、平均的な身体能力が上なんだ。……どおりで強エはずだ」

紅亜が多重人格者。なるほど、それなら今までの突発的な行動にも納得できる。いきなりツンツンしたり、今のようにデレデレしたり。

「ま、そいつアまだ微妙な方だな」

「微妙？」

「そいつの場合、多重人格者のなりかけ、ツツーかなア。確かに多重人格は持ち合わせているんだが、そんなはつきりしたカンジじゃねエンだよ。あー……つまり、ただ感情の起伏が激しい程度で、ま

だ多重人格者になりきっていない、ツツーこッたア」

アレンは上手く説明できない事にイライラするように、明るいブラウンの髪を掻き乱す。

「多重人格って、生まれつきのものだろ。お前の話だと、成長するにつれ多重人格者になっていくみたいに聞こえるんだけど」

「だからそーなんだよ。『異能者』はばっさり言ッちまえば、人間じゃねエんだ。そこいらにうじゃうじゃいる奴らとは体の作り自体が違うんだよ。オレらの場合、多重人格っていうのは生まれつきじゃなくて、成長するにつれ身につくものなんだ。分かッたか」

俺は静かに頷く。また、それが。普通の人間とは違う。普通じゃない。

動物に<sup>へんげ</sup>変化できる力があるくらいで、見た目はまるっきり人間なのに。

アレンは俺の感情を察してか、寂しげな声でこう呟いた。

「……変化<sup>へんげ</sup>できる時点で、人間じゃねエんだよ。異能の力は生まれ持った『才能』だ。それを活用しなけりゃ、オレらは人間でもなけりゃあ動物でもない、存在価値のないものになッちまうからな」

その言葉の後、はッ、らしくねエとアレンは笑い飛ばして、表情を性悪笑顔に戻した。

「ま、そーいうこッたア。で、おめエに聞きてエコトがあるンだが」  
「なんだ」

「オレ様の相棒、エマルノスはどこに居る？まさか、道端においてきたってこたアねエよな？」

「あー、あいつなら庭に放しているけど？」

そう言ってやるとアレンは安堵のため息を漏らし、縄で縛られた体でベットに飛び込んできた。

「ふい、よかったぜエ。……で、オレ様の下僕達もそこにインのか？」

「……下僕？誰？」

「ティベル、ダウマージ、ルドルス、カドヴィラ、オルナクス。下

僕達の名前だ」

……いや分かんねえよ。なんだその怪物みたいな名前。  
と、疑問に頭を悩ませていると

「……ねえ、もしかしたら……」

紅亜が耳にささやきかけてきた。うわ、なんかくすぐったい。

だが、そんなささかな喜びも、次の言葉ですぐさま消え去ってしまった。

「……あたしが倒した、ライオンのこと……じゃないかな」  
……。

忘れてた。

十五、ボディプレス恐怖症（前書き）

主な登場人物

ふじたに

・藤谷

鷹太郎

ふじたに

・藤谷

美虎

もちづき

・紅亜

てんま

かさい

けいこ

アレン

・望月

典馬

笠井

蛍牙

吾煉

## 十五、ボディプレス恐怖症

「ン？あ、え？おいなんだその顔は。なに「やべっ、忘れてた」  
みたいな顔してンだよ」

あざといな、こいつ。

「……まさかたア思うが、おめエら……」

「……忘れて来ちゃったよ。てへっ」

紅亜が可愛らしくほっぺに手をあてて言った。

するとアレンは憤怒。活きのいい魚ばりにベットの上で跳ねてきた。

「このバカ野郎！あいつらア下僕は下僕でも大切な下僕だ！なんてことしてくれたンだ！」

「知らねえよ！お前が勝手にあいつらが無駄死にさせたんだろ！」

「そもそもその熊猫が強すぎんのがわりインだ！なんでライオン5匹をあんな短時間で倒すンだよ！」

なんか理不尽な方向に怒りが向いてるんだけど！

つか、なんで俺らが敵の下僕の世話までみないといけないんだよ。

「強くないもん。あのライオンと試験君が弱いだけだもん」

「試験じゃねエよ吾煉だ！てめエ名前ぐらい覚えやがれ！」

「アレンよりシレンの方がかつこいいし！」

「ンだとオ！？表でやがれこのクソアマ……ちょ、なんで熊猫<sup>パンダ</sup>になツてンだよ！！あッ、いや、勘弁してくれ、いや待てボディプレスは待て待て待てそれくらッたら天に召されるからアいやアアアアアアアア……」

数時間後。俺が横になっていたベットには、アレンが寝ていた。  
「うア……もう……いやア……その技だけはア……」

さつきからずつとうなされているが、大丈夫だろうか。

まあ、縄で縛られているにも関わらず、一度ボコボコにされた相手を罵倒するとは……アレン、お前はなかなか英雄<sup>バカ</sup>だった。

まるで美虎にマッハパンチをくらった後の俺を見ているようで、少々背中に寒気を覚える。

時は夕暮れ。そろそろ友達の家遊びに行つた美虎が帰ってくるだろう。

そしたら、このベットに横たわる少年をなんて説明すればいいのやら。

「はあ……」

ちなみに、紅亜は少し早めに風呂に浸かっている。調子に乗って「一緒に入るか？」と言つたら顔を真っ赤にしてぶん殴られた。

……望月に紅亜を見せたらどうという反応をすんのかな。などとうでもいい事を考えていると、後ろの方で扉の開く音。

美虎！

俺の勘が、そう叫んだ。

まず俺がつっていた行動は、アレンを隠すこと。俺はすぐさまアレンの上に馬乗りになって、覆いかぶさるようにしてアレンの体を隠した。それで上から布団をかぶれば完璧だったが、そんな時間はない。

はたから見れば、俺が男を襲っているように見えなくもないのだが……。

「兄さあん、ただいまあゝ！」

ニッコニッコしながら正真正銘の我が妹、美虎がこちらに駆けてくる。勘大当り。

……！この流れは、まさか……！

自身に身についた究極の防衛本能により、俺はすかさず体を横へ転がした。

案の定、俺が一秒前にいた場所

つまりアレンの体の上に、

つか体に、美虎の隕石の如きボディプレスが炸裂した。

「ぐぼっ!!」

おそらくプレスに耐性のない少年の体には、この必殺技はキツイだろう。俺だつてキツイんだから。

「あれえ、兄さぁん？」

尻の下でのびている少年に疑問符を浮かべ、美虎は首を傾げる。

……誤魔化すのは、大変そうだ。

「……………」

「……………」

美虎が、俺を見つめている。その瞳に映るのは、俺の姿か、はたまた軽蔑か。

寢室のベットの上で、正座の姿勢で美虎と向かい合っていた。光景自体は悲しくもよくあるもののだが、今回はちよつと違った。

部屋中を満たす沈黙に、今までにないほどの緊張を覚える。

「兄さぁん……………」

「……………なんだ」

美虎がらしくない様子で控えめに俺を呼ぶ。そして、目線を少しずらし、俺の後ろで縄に縛られて立っているアレンに目をやる。

「なんでその子はあ、しばられているんですかぁ？」

「……………話すと、長くなるんだ」

「そんなのあたりまえじゃないですかぁ。逆にい、長くなかったら問題ですう」

珍しく今回の美虎に笑みはない。目線を再び俺に合わせる。

「……………聞いてもいいか、美虎」

「……………なんですかぁ？」

「……………今のところ、お前はなんであんな状況になったのか。見当がつくか？」

俺が問うと、美虎はわざとらしく考える素振りをしてから、



「少し」

と呟いた。

「先に言っておく。それは誤解だ」

「わたしの考えているコトが、わかるんですかあ？」

「大体な。……でも、一応、確かめておこう。お前の予想を聞かせてくれ」

「兄さんが道端で知り合った男の子を家に連れ込み、寝室のベットの上で特殊なプレ……」

「OK。わかった。今一度言おう。それは誤解だ」

やっぱり変な誤解をされてた。

確かに、ベットの上で縄跳びで縛られてアレンの上に覆いかぶさった。……ああ、それが間違いだった。あの行動さえ取らなければ、まだ今より脱出が楽な状況になっていたかもしれないのに。

このままでは、女だけでなく男にもそういった興味がある見境なしの変態として認識されそうだ。

「俺は男に興味はない」

なので、きつぱりと言い切る。これだけは、自信をもって言えるぞ。お兄ちゃんにそんな趣味はない。

「でもお、わたしが考える限り、その予想が一番しつくりくるのですがあ……」

「しつくりってなんだ！お前俺にそういう趣味があると思ってたのか！？」

「少し」

「んなことあるかア！俺は紅亜一筋、女子一筋だ！男子に特別な興味を持つような人間じゃない！」

それなのに、美虎ときたら考える素振りを見せる。勘弁してくれ、妹様。

助けを求めるように後ろを振り向くと、アレンは美虎を直視しながら、ぶるぶると震えていた。どうやらボディプレス恐怖症に陥ったようだ。紫色に変色した唇でばそばそと「ボディボディボディ……」

……」とつぶやいている。変態にしか見えないからやめてくれ。  
にしても、どう誤魔化そうか。道端で行き倒れていたから、家に連れて帰って面倒みていた、とか？無理だ。なんで親切に家に連れてって縄でしばんないといけないんだ。鬼か俺は。

だったら、コンビ二かどっかでこいつが強盗していたのを、俺が勇敢に戦って捕まえた、とか？馬鹿言うな。そんな状況だったらまっさきに警察に通報するだろ、普通。

……結論。逃げ場なし、か。

いや、まだ策はあるはずだ。考えろ、考えるんだ……。  
と、そんな緊迫した状況の中。

けたたましいドアを開け放つ音と共に、空気の読めない奴が登場。  
「鷹太郎、お風呂あがったよ」

風呂上がりの紅亜だ。

上機嫌だった笑顔が、寝室に足を踏み入れた瞬間、「ああ、やつてもーた」という顔になる。

徐々に表情が感情を失っていき、ついには無表情になった。え、怖っ！その顔！

……にしてもタイミング悪いなこいつ、と心の中で舌打ちをした俺だったが、いや、これはもはや、と直ぐ様ひらめいた。

ここで紅亜が「あゝ。縄跳びぐるぐるこつこ面白かったね！また三人でやりたいね！」みたいな意味不な事を言ってくれれば、突然の事に弱い美虎をなんとかまるめこむことができるかもしれない。そこで俺が「三人で」のところを強調すれば、万事解決にはならずとも、この状況を打破することはできるはずだ。

そんな俺を含むみんなの視線が集まる中、紅亜が言ったのは。  
「よっ、鷹太郎のばかぁ！浮気者お！」

それだった。

って、さらなる修羅場作ってどうすんだこの馬鹿ぁー！！



十六、説明 please (前書き)

主な登場人物

ふじたに

・藤谷

鷹太郎

ふじたに

・藤谷

美虎

みこ

・紅亜

もちつき

・望月

アレ

典馬

・笠井

かさい

螢牙

けいこ

・吾煉

アレン

## 十六、説明 please

何故、こうなった？……なんてことは、もはやどうでもいい。

俺はただ、はやくこの状況に終止符を打ちたかった。

この状況、というと。

ダブルベットの上に俺と紅亜が並んで正座。向かい合うは本当に珍しく無表情の美虎。背後に立つのは今だ縄で縛られた体たらくのアレン。

なんだこれ、といわざるを得ない状況の中、まず口を開いたのはやはり美虎だった。

「兄さあん、説明していただけますかあ？」

ゆったり口調。これにはひとまず安心。無表情でこの口調が封印されていたら、間違いなく俺の命は危うかっただろう。

俺は少々しどろもどろになりながらも、「あ、はいっ」と返事をした。もはやこの状況下、ここにいる美虎以外の三人に拒否権はない。

「はは……なんか、道端でこいつが倒れててさ。あ、その時にはすでに縄でしばられてたんだ。どうしてだろうな。うん。で、そのまま放っておくと野良犬にでも喰われそうだったんで、家に持って帰ったんだ。体調悪そうだったから、ベットで寝かせてさ。したら、急にこいつが「てめエ、ふざけたツラしやがッて」って襲いかかってきて、んで俺が取り押さえようとしたところ、丁度お前が帰ってきたってわけだ。つまり、紅亜のさっきの発言はただの誤解だ」  
中々上手く誤魔化せたと思った。が、思ったより我が妹は強敵だったようだ。

俺の後ろで震えるアレンに目をやり、

「その子を縛っているその縄跳びの縄、わたしのなんですけどお？」と指摘してきた。くっ、なかなか鋭いじゃないか。

だが、俺だってこんなもんじゃないぞ。

「証拠でもあんのか？」

そう言ってやった。言ったあとに気づいた。これじゃまるで犯人が探偵の推理から逃れようとしてるみたいじゃなか。

「名前、書いてありますよお」

しかも逃れられなかったし。

「あー、同姓同名。こんなこともあるんだな。こいつを縛った奴、お前とおんなじ藤谷美虎ふじたにみこって名前なんだ。なるほど」

だが、めげないのが俺だ。

諦めが悪い、とも言うが。

そんな俺のしらじらしい態度に呆れてか、美虎は短いため息をついた。

「本当のことを言うてくださいいよお、兄さあん……」

どこか悲しげにも聞こえるその声に、少し罪悪感を覚える。

でも、いいかい、美虎。君に本当の事をいえば、どうせ返ってくる言葉は「頭大丈夫ですか？」っていうのが予想できているんだ。そこらへん歩いてる一般人に「道端でいきなりライオンに襲われた」なんていつても、信じる奴はほとんどいないだろう。

どうしたものか、とさりげに横へ視線を流すと、紅亜は直ぐ様こちらに向けていた視線を逸らしてきた。あたしに助けをもとめないで、とでもいいただな、おい。この状況はお前のせいで悪化したんだよアホ。

俺は諦めの混じったため息をわざとらしく吐き、真剣にこちらを見つめる美虎に顔を向ける。

「……わかった。正直に言う。実はこいつ」

後ろでガクガク震えるアレンを親指で指し、

「お前のファンなんだ」

そう言ってやった。

案の定、美虎は肩透かしでもくらったかのように「は？」という顔になる。

「ファン、ですかあ？」

「そう、ファンだ。お前のファン。この町で密かに栄えている『I  
？MIKO』っていうファンクラブの会長らしい」

もちろんそんなのは（俺の知る限り）ないのだが、もはやこれ意  
外の嘘は浮かばなかった。

「わ、わたしにファンクラブなんてあるんですかあ？」

驚愕に目を見開く美虎。そんなに驚くことでもないだろ。眉目秀  
麗な我が妹ならそんなファンクラブがあってもおかしくはない。

……むしろありそうだ。

「その証拠として、こいつがここに<sup>うち</sup>いるんだ。なんとこいつ、家の  
前でお前のこと待ち伏せしてたんだよ。所謂、ストーカーって奴。  
だから俺がお前の身を案じてこいつを捕まえ、縄で縛り上げ、ベッ  
トに寝かせ……寝かせ？……寝かせ……て、一体美虎にどんな要件  
があつたのか聞いてたんだよ」

いやそれ寝かせる必要ねえだろ、と自分につっこむ。

「したらこいつ、突然「美虎さんの全部が好きだ！召使いにしても  
らいにきた！」って言うてきてよ」

「ま、待つてくださあい、兄さあん」

美虎が話を一旦止めにかかった。やっぱり急展開には弱いらしい。  
「ん、なんだ」

「それはつまりい……この子を、わたしの召使いにしたい、ってこ  
とですかあ？」

いや急展開に弱すぎんだろ妹。てか俺の水モ疑惑どこにいった。  
助かったけど。

けどまあ、召使いか。それも悪くないな。

このまま逃がすとまた仲間を大勢連れて逆襲しにくるかもしれない  
いし、なにより、まだこいつに聞いてないことが山ほどある。

「ああ、まあ、そういうことだ。悪くないだろ？召使い」

「悪くはないですけどあ……ううん……」

悩む美虎。返事を待つ俺。こちらにも急展開についていけない紅亜。  
ひたすら震えるアレン。

そんな奇妙な奴らが集まった寝室に、秒針の音だけが響く。もうひと押し……ってところか。

あー……やべえ、汗が止まらない。

ハヤク外の空気吸いたい。

ので、ボソツとこういう単語をつぶやいてみる。

「……………ボディプレス」

その場にいた一人が過剰に反応する。俺の意図を読み取ったらしい。

そいつは体の震えを必死に抑えながら、美虎に頭を下げてこう叫んだ。

「オッ、オレを召使い……いや、弟子にしてくださいせエ、姉貴……！」

いやそれはないだろー。

「そこまでいうならあ……………」

いやあつたよー。

「そんなにわたしの事を愛してくれる人はあ、兄さん以外だと、あなたがはじめてですよー。よろしくお願いしますう」

両手をベツトの上に添え、ていねいに頭を下げる美虎。

え……なんだこれ。自分で言うのもなんだけど、ほんと……なんだこれ。って展開だった。

でもまあ、これでひとまずは一件落着だな。

そう安心して寝室を出ようとする俺。

「待ってくださいあい、兄さん」

を呼び止める美虎。ええ、分かっていましたとも、この展開。

「兄さんまたわたしに……嘘、つきましたねえ」

「……………ぽん」

「かわいいキャラつくつてもだめですよあ？ほんともう兄さんったらあ……………」

「ボク日本語わかんないポン。それでは失礼するポン……え、ちょっ、まっ……………なにその構え！美虎さん、なんかあたらしい技を会得しようとしてない！？やっ、ま……ぎいやあああああ……！」



その日の夕方、町中に、男の叫び声が轟いたという。  
警察？いえいえ、それよりも救急車が必要そうです。

奴の背中  
は甲羅です  
(前書き)

主な登場人物

・藤谷鷹太郎

・藤谷美虎

・紅亜

・望月典馬

・笠井螢牙

・吾煉

## 奴の背中が甲羅です

熊の博士との戦い、幻獣に乗った少年の襲来、妹のボディプレス炸裂から一週間と一日。

「先週はいろんなことがあったなあ……」

俺はリビングのソファに体をあずけながら、気だるげに欠伸をした。

日曜日。特にすることもなく、美虎の用意してくれた朝食を無理やり胃に詰め、俺はぼーっとテレビの画面を眺めていた。

美虎は早朝からアレンを連れて出かけてしまったし、何故か紅亜も家中どこにも見当たらない。散歩でも行ったのかな。

上半身を起こし、俺はテーブルの上の携帯電話を手取る。暇だから、望月とか笠井でも呼んでみるか。

この二人には学校ですごく心配された。そりゃ、同級生の部屋があんな有様ならその反応も仕方ないか。

先週の月曜日、登校して教室に入るなり無言で望月が抱きついてきた。うぜえ。

「無事生還したか、藤谷」

その後ろから笠井。お前は戦線メンバーか。

ま、どちらもいい奴なのは確かだった。

一夜漬けであの部屋の有様の言い訳を考えたのに、二人はあえてそれに触れず、ただ俺の身の安全だけを考えてくれた。

いい仲間を持った事と運命に感謝しつつ、俺はまず望月に電話をかけた。

ワンコールで相手と繋がる。

『ういーっす。今日も今日とて萌え萌えきゅーんの望月でーす』

めっちゃ前言撤回したくなる。堪えろ、俺。

「おはようロリコン。今日も元気だな」

『そりゃ、タカから電話なんて滅多にないから、嬉しくなるわな』

「そうだったか？2ヶ月に一回はお前にメールするだろ？」

『いやそんな「え？めっちゃ頻繁にお前と通信してんじゃん」みたいに言われても。んで、なんの幼児？あ、ごめん。何の』

通話終了。おつかれさまでした。

と思つたら今度はあちから着信がきた。

「悪い悪い、手が滑つてな。ついでに爆ぜろロリコンって言いたくなつたよ」

『口もすべっておりますがな。で、何の幼女？間違えた。何の』

』

再び通話終了。おつかれさまでした。

と思つたらまたあちから着信。

『ういーっす。今日も今日とて萌え萌えきゅーんの望月でーす』

「名前変えろ。今日からお前はロリペドだ」

『で、何の』

「繰り返したら殺すぞ」

『わ、分かつてるって。怖いな、ほんとに。で、何の用事？』

イラつく気持ちを落ち着かせるために、一度深呼吸。

「…………お前今暇？」

『暇っちゃあ暇かな』

「なら遊びにこいよ。俺も暇なんだ」

『え、マジで！？行つていいの！？』

喜びを隠しきれない望月。それもそのはず、こいつは美虎のこと大好きだからな。つか、年下全般にだな。

今、家に居ないけどさ。

「おう、美虎が「お菓子つくつてまっす」って言ってるぞ。

あ、ついでに笠井も誘つておいてくれ」

『おけおけ、いますぐ行くからなー！』

通話が切れる。

とほぼ同時に、家のドアチャイムが鳴った。早っ！

俺は急いでソファから立ち上がりリビングを出て、玄関のドアを開いた。

「お前らなんでそんなに早……いんだ……よ？」

が、そこにいたのは、俺のよく知る馴染み深い連中ではなかった。身の丈2メートルほどもある体に竜胆色の着物を着付けた、大男。腰には刀。

だが銃刀法違反の前に、もう一つかなり気になるところがあった。遅しい体にくっついていて、奇妙なそれ。

亀の甲羅だった。

……コスプレ？

一、あなたがE太郎様ですね？（前書き）

主な登場人物

- ・藤谷 鷹太郎 ふじたに ようたろう
- ・藤谷 美虎 ふじたに みこ
- ・紅亜 もろつき
- ・望月 典馬 アレン てんま
- ・笠井 螢牙 かさい けいご
- ・吾煉 アレン
- ・水紋上 珍彦 みなもがみ うずひこ

一、あなたがE太郎様ですね？

最初に言っておきます。この目の前に立つ大男は知り合いではありません。

玄関に直立する、このご時世に近所などではあまり見かけない着物の大男。腰には鞘に収まった刀。長い黒髪は一つに束ねてあり、目付きが凄く厳しい。おもわず後ずさってしまうほどのオーラを持った男だった。

それだけなら、「あ、家間違えてますよ？」で済む問題だったかもしれないが、どうやら今回はそうもいかないようだ。

なにせ、背中から甲羅が見えてるんだもの。こいつもおそらくは紅亜やアレンと同じ、第二次動物大戦に絡んでいる『異能者』って奴なんだろう。この呼び方はあまり好きじゃないけどさ。

というか、なんでさっきから直立したままなんだろう。しかもずっと俺から目を逸らさないし。

大男はまじまじ観察している、という体ていでもなく、ただじっと俺を見据えたまま、そこに立ち尽くしているのだった。正直、かなり不気味。

……………。

ひたすら、沈黙。

最近、こういう気まずい空気の沈黙多いよな。主に美虎関係で。などともいいたいことをのんきに考えていると、唐突に男は口を開いた。

「あなたが、E太郎様ですね？」

「人違いです」

すぐドアを閉めた。いやだって俺E太郎じゃないし。鷹太郎だし。が、すぐにドアチャイムが鳴る。ピンポピンポピン、となにやらリズムを刻んで。うぜえ。

仕方なくドアを開けると、先程と全く同じ姿勢で男が直立。ほん

とあなた直立が好きね。

「……なんすか」

「あなたがE」

「人違いです」

すぐドアを閉めた。鍵もかけた。なんか今日は朝っぱらからバグ  
ループが多いな、はは。

……とまあ、どうせまたドアチャイムが鳴らされることは目に見  
えているので、鍵を開けてドアを開く。言うまでもないが、大男は  
直立。威風堂々とね。

「俺、E太郎じゃありませんけど」

相手が聞いてくることを予想して前もって言うておく。

すると大男は一ミリも表情を動かさず、

「ええ！！なんだって！？」

とオーバーリアクション。普通に考えて日本にE太郎なんて名前  
の奴はいないと思うけど……。

「では、あなたのお名前は？」

なおも口調だけ焦った様子で名前を問い直してくる男に、

「藤谷つす。下の名前が鷹太郎で……」

と答えてやると

「なッ、なんだって！？」

と再び同じ反応。すると大男は懷からメモ帳を取り出し、しきり  
にページをめくる。似合わないことこの上ない。

というか、これあと何回繰り返せばいいんだろう。

もうすぐ家に望月や笠井だっってくるだろうし、いつまでもここで  
立ち往生している訳にはいかない。

さっさと話を切り上げて、帰ってもらおう。

「どちら様すか？もしかしたら、家間違えてるかもしれませんよ」  
すると大男はあるページに目を落とし、

「あ……失敬、鷹太郎様でした。失敬失敬」

全然反省してねえ。



「……で、もう一度お伺いしますが、どなたですか？」

「失敬失敬、自己紹介が遅れました。私は水紋上みなもがみ 珍彦うすひこと言います。主に日本各地を拠点とする、甲羅族の者です」

熊猫、獅子の次は亀か。なんで家うちにばっか集まるのかな、こういう奴らって。

以前、アレンが紅亜を拐った日の夜の事。紅亜は確か「これから戦争終結を邪魔しにたくさんの敵が現れる」なんてことを言っていた気がする。

結果、理由はよくわからないがアレンは戦争を終わらせる為に俺を殺しに来たわけだが、今回は本当に、戦争集結を拒む輩の一人かもしれない。つまり、俺たちを殺しに来た。

……いやなんか、そんな雰囲気を感じさせない喋り方だけどさ。

「今日は鷹太郎様に、お願いがあつて参りました」

「お願い？」

珍彦と名乗る男は頷く。

「……私の、フィアンセが拐われたのです」

俺の予想の斜め上をいきました。

……え、婚約者フィアンセ？ ということ？

大男は今までの厳しい表情とはうって変わって、何かを思い出するように悲しげに瞼を閉じる。

「あれは……そう、昨日の夜の事でした」

結構最近だね。つか語り始めちゃったよ。もうすぐ望月達来るのに。

「私は、実家のとても広い寝室のとても大きいベットで眠っていました。隣には私の美しいフィアンセ。とても……幸せでした」

なんかいちいちひっかかる物言いだな……と、それはまあ置いて。

「しかあし！ そんな夢のような空間は、一夜で消え去ってしまいま

した。なんと、竜宮族の奴らが屋敷に忍び込み、あろうことか私のフィアンセを誘拐してしまったのです！」

「待て待て。その竜宮族っていうのは？」

珍彦は首を微妙に傾げ、「知らないんですか？」とバ力を見るような目で言った。知るわけねえだろ。

「竜宮族というのは、主に海に関係した異能者たちの一族の事です。昔は最強を誇っていたのですが、今では雑魚一族ですね」

「？　なんで弱くなったんだ？」

いつの間にかタメ口だな、俺。

「というか雑魚一族にフィアンセ奪われるとか、しょうもないなこの男。」

「竜宮族が色んな一族に分かれていったからです。元々『海の一族』にしては大きすぎたんですよ。そこから私たち亀の能力を持つ『甲羅族』やワニの能力を持つ『和爾族』などに別れて行って、結果いくつもの能力を失った竜宮族全体は、衰えていった、というわけです」

つまり竜宮族が本家で、甲羅族が分家ってことか。と、それともかくして。

「なんでその竜宮族に、甲羅族のお前がフィアンセをさらわれなくちゃいけないんだよ」

「そこがなにやら面倒でして。私のフィアンセ、名を啼草なくさと申しますが、竜宮族のお姫様なんですよ。半ば強引に私が竜宮族から連れ去らったものなので、当然の如く竜宮族の長、つまり啼草の父が激怒し、まあ、こんな状況になってしまった、というわけです」

……それ、お前が全部悪いんじゃないのか？

そう言ってやると

「そうかもしれません。ですが、間違いなく私たちは相思相愛だったのです。なんとしても、再び啼草を私の手に戻したい。ということと……フィアンセ奪還計画に鷹太郎様も協力していただきたく、今日は参りました」

いやいやいや待て待て待て！

「なんでそれに俺が参加しなきゃならないんだよ！いろんな奴にこれを言ってきたが、俺は極一般の男子高校生だぞ！お前みたいにそんな力が」

「大丈夫です」

俺の言葉を遮る、珍彦の自信に溢れた声。

「あなただけではダメです。わたしだけでもダメです。でも私たちなら　あなたがたとえ一般人だとしても、勝率はあります」

「……俺は相手に勝てるかどうかを聞いているんじゃない。なんでそれが俺じゃなきゃいけないのかを聞いているんだよ」

自分で言っていてわかる。俺の口調にやや焦りが混じってきていることを。

こいつ、なにかがおかしい。格好とか外見面ではなく、内面の方で、何か違和感がある。

気のせいなのか……？

「何故、私があなたを選んだのか……ですか。………そうですね。あなたの家から、幾つかの『異能者反応』がでたからです。その家の長があなただった。家の長であるということは同時にその家に住む人々の中の長でもあります」

こいつ、やっぱりこの家に紅亜達が住んでいるのを知ってたのか。そりゃそうか。じゃなきゃ理由もなくここを訪ねてこないだろうし。「回りくどいな。何が言いたいんだよ」

「失敬失敬。つまり、あなたを含め、この家の全員で私のフィアンセ奪還計画に参加してもらいたいのです」

この家の全員、ということとは

「だったら俺は断るしかないな」

「ええ、なんですか！？お礼はたくさんしますよ！」

「そうじゃなくて。この家には俺意外の一般人もいるんだ。そいつを巻き込むわけにはいかない」

すると何故か、珍彦は険しい表情のまま微笑を浮かべて、自分の

背後、外に視線を移す。

「……おや、誰か来ましたね」

そしてそう呟いた。確かに、何かが道路の表面を削りそうな勢いでこちらに向かつてくる音が聞こえる。しかも、だんだんこちらに近ずいてくるようだ。

もしや望月たちが全力疾走しながらこちらに向かつてくるのかと予想したが、俺たちの目の前に現れたのは、想像もなかった奴だった。

そこに登場したのは、一匹の獅子。つまり、アレンだった。

相当な速さで走ってきたのか、呼吸がかなり荒い。

「どうしたアレン。お前美虎とどつかに」

出かけてたんじゃないのか、という言葉をつぐ前に、言葉が途切れた。

もしかして……。

「ねッ、姉さんがッ！変な奴らに拐ひねられてッ」

そうアレンが乱れた口調で言い終える前に、俺は男の胸ぐらを掴んでいた。

「てめえ、俺の妹に何をしたッ！」

だが珍彦は以前動揺した様子もなく、口を開く。

「何もしていない……と言えは嘘になります。どうですか？自分の大事な人を奪われる気分は。決して清々しい気分ではないでしょう？」

俺は自分の考えていることが怒りで整理できなくなった拳句、男の左頬を本気で殴っていた。

が、珍彦は厳しい表情のまま、その場に固まって俺を見下ろしている。

こいつ……鉄みたいに皮膚が硬い。

「あなたの妹さんは甲羅族が保護しました。これでこの家には、一般人はあなたしかいないはず。ではもう一度お願いします。どうか、私のフィアンセ奪還計画に協力してください、鷹太郎様」

頭を僅かに下げる珍彦。

お願いじゃなくて、脅迫だろ、クソ野郎。

一、あなたがE太郎様ですね？（後書き）

読んでくれてありがとうございます^^

二、まア、色々となア（前書き）

主な登場人物

ふじたに

・藤谷 鷹太郎

ふじたに

・藤谷 美虎

もちつき

・望月 典馬

かさい

・笠井 螢牙

アレン

・吾煉

みなもがみ

・水紋上 珍彦

## 二、まア、色々となア

「分かった、その計画に協力する。……だから、妹だけは巻き込まないでくれ」

迷うことなく、俺は珍彦（ちひこ）の二度目のお願いを受け入れた。家族を人質にとられたら、抗うすべなんてどこにもない。

珍彦は「承知しました」と頭を下げる。

「ではお客様もいるようですので、詳しいことはまたの機会にしましょう。なるべく早くお迎えにあがりますので、その間、しばしお待ちください。では……」

そう告げてもう一度頭をわずかに下げると、珍彦はアレンの横を通り過ぎ、帰っていつてしまった。

その様子を訳も分からず眺めていたアレンは、去りゆく珍彦の背中を見つめるばかり。無理もないだろう。俺だって訳が分からない。

いきなりの訪問者に頭が混乱していたせいか、きづけば太陽が沈みゆく時間になっていた。

あの後、望月と笠井が家に來たのは覚えているが、どんな話をしたのか覚えていない。

まあともかく、美虎が何事も無かったかのように無事に帰ってきたことには安心した。それだけで今は十分だ。

唐突に、ドアをノックする音が部屋の静寂をやぶった。

「鷹太郎、いる？」

紅亜のようだ。いつのまに帰ってきたのだろうか。俺が短い返事をする、ドアを控えめに開け、顔をちょこつとのぞかせた。

「なんだ？」

「ホットケーキ食べたい！」



「……もうすぐ夕飯だぞ」

「甘いものは別腹だもん」

「……」

やれやれ、と腰を上げ、俺は自室を出る。

……そういやこいつ、暴飲暴食パンダだったな。

「あら、兄さあん。どうしましたあゝ？」

リビングルームに入ると、美虎が雑誌を広げてソファに座ったまま、こちらに顔を向けてきた。

「紅亜がホットケーキ作ってくれって」

そう短く答えて俺はキッチンへ向かう。部屋を一通り見回すが、アレンの姿はない。

「美虎、アレンがどこ行っただか知らないか？」

「アレン君？アレン君ならあ、たったさっき『用事があります』って言うて出かけていきましたがあ？」

「そうか……」

参ったな。珍彦って奴の事を話そうと思ったのに。

「何時頃帰るかは言っただけだったか？」

「いいえゝ。ただ、とっても真面目な顔してましたからあ、大事な用事じゃないでしょうかあ」

「大事な用事……ね」

きつと今日中には帰ってくるだろうから、そしたら説明しよう。俺はホットケーキを焼きながら、そんな風に考えるのだった。

だが予想に反して、アレンの奴はいつになっても帰ってこなかった。

すでに夜の１１時をまわっている。いつもなら、あいつはこの時間寝ているはずだ。

寝る間も惜しんで行くほど、大事な用事だったのかもしれない。それか、出かけると言うて二度とここに戻ってこないとか。

元々あいつがここににいる理由はない。ただ、美虎の召使いつていうか舎弟として扱うことを決めたら、本当にその判断に従ったのだ。最初は、みんなが寝静まった後に俺を殺そうとしているのかもしれない、などと色んな心配をしていたが、一週間もたって何事もなかったということは、安心していいだろう。

だが反比例して、アレンに対しての疑問は増えるばかりだ。

なぜあいつは、俺を殺すことが戦争の終結だと考えた？

なぜあいつは、その当初の目的を無視して、俺を生かしている？  
なぜあいつは、この家に停滞しているんだ？

疑問は増えることはあっても、減ることはない。アレンに聞いても、あいつは何一つ答えようとしないからな。

はあ、とため息をもらしたところで、ふと自室の床の上に畳まれたあるものが目に入る。

紅と白に統一された、ジャージ。そう、ジャージだ。

確か約一週間前の夜、紅亜が『最強の武装』だの言って俺に見せてきたやつだ。いや、見せたっていうか、着たんだけどさ。

そっぴいあの時……いや、もしかすると今回も。

俺は丁寧にたたまれたそれを着用してみる。

するとどうだろうか。またあの時と同じく、背中に羽が生えたと錯覚するほどの感覚が。

「……すげえ」

思わず感動の声を漏らす。やっぱり、このジャージにはすごい力があるんだ。紅亜は自分が着てもどうにもならなかった、って言うてたから、きつと変化の力をもたない人間限定で特殊な力が発動するんだろう。

軽く部屋の中をランニングしていると、これまた予想通り、テンションが上がってくる。ほんとなんなんだこのジャージ！素晴らしいな！

そんな感じでしたらく部屋の中をぐるぐると激走。これがまた楽しいのなんの。

と、そこで野性的かつ冷静な声をかけられる。

「おめエ、なにしてンだ……？」

ドアの付近で思いつきり苦い顔をしているアレンだった。

「何って、ちよっくらランニングだよ。いやあ、いい汗かいた！」

そう言って俺は床にどっかりと腰を下ろす。

アレンもそれにつられるように、俺の前に座る。

「お前、どこいったんだよ。大事な話があつたのに」

「オレも、その大事な話とやらをしにきたンだよ」

「は？どういうことだよ？」

今気づいたが、アレンはなにやらいつものボロ雑巾のような格好とは違った、いかにも戦闘服のようなものに身を包んでいた。

ということは……

「話は甲羅族の野郎に聞いた。熊猫の女を呼べ。伝えなきゃならン事がある」

俺はアレンに言われたとおり、すでに寝ていた紅亜をたたき起こし、自室へと引っ張っていった。

「んもお、なによ鷹太郎。せつかくぐつすりしてたのに……」

「悪い。今度ホットケーキ作ってやるから」

アレンがな。

「……ンで、集まったな」

「おう」

「ふえ？」

アレンは俺と紅亜の顔を交互に眺めてから、俺に視線を止める。

「まアさっきまでなンでいなかったかっていやア、甲羅族の奴に話を聞きにいったからだ」

「甲羅族……ってあの、珍彦とかいう奴のことか？」

「あー、ちげエと思う。俺が部屋で姉貴……姐さんとくつろいでたら、外にうざったいほどの気配を感じてなア。追っかけたらあの野

郎逃げたんだが、あっさり捕まっつてよオ。ンで、そいつから話を聞いてたつてこつたア」

「だからって、なんでこんな遅くなるんだよ」

そう言つとアレンは目を泳がせ、

「まア、色々となア」

「またそれかよ。で、その装備は？」

俺はアレンのやたらかつこいい装備を指さす。

軍人が来てそうなボディアーマーを少しばかり改造したような、

全体的に黒い印象の装備。

「鈴音式物体移動術りんねしきぶつたいいどうじゆつとやらで、この女から召喚してもらつたんだ」

「りんねしき？」

紅亜はまぶたを擦りながら、中指と親指をこすり合わせる仕草をする。

「あたしの一族に伝わる魔術のこと。ほら、今鷹太郎が着てるその武装を呼び出す時、鈴の音が鳴る指パッチンしたでしょ？あの時使つた術が、鈴音式物体移動術なの」

「じゃあ、クマーク博士を召喚する時に使つたのも、その術なのか？」

「ううん。あの時使つたのは、鈴音式召喚術りんねしきしやうかんじゆつ。簡単に言えば、霊的なモノは召喚術、それ意外は物体移動術でその場に呼び出すつてこと」

……霊的つて、クマーク博士は幽霊だったのか？

「ツと、話が逸れたな。鷹太郎、おめエオレらに話すことがあんだろ？オレは今オレ達がどんな状況におかれてンのかは分かつてるつもりだが、その女はまだ知らねェんだろ？」

「ああ、そうだな……」

アレンに促された俺は、今朝家に訪問してきた甲羅族の男について、全て紅亜に話した。

「……つまり、あたしたちもそのフィアンセだっかんケーカクに協力しなきゃいけない、つてこと？」

「そういうことだ。……悪いな。勝手に決めちまって」

「べ、べつに鷹太郎が悪いわけじゃないでしょ。美虎さんを人質にとられたらどうしようもないし……」

「そうだな。引き受けちまったもんは仕方がねエ」

「そう言いながら舌なめずりをするアレン。早く暴れたくてうずうずしているようだ。」

血の気のおおい奴だな、全く。

「で、問題なのはおめエだな、鷹太郎」

「……え、俺？」

「当たり前でしょ。鷹太郎は人間なんだよ。もし竜宮族の攻撃を受けたら、一発であの世逝きだよ！」

刹那、部屋に凜とした声が響く。

「心配いりません」

そちらに顔を向けると、案の定、例の男が佇んだいた。窓から入ってきたようだ。

……二階なのにな。

「鷹太郎様は……間違はなく、このなかで一番の逸材ですから」

そして一言、そう意味深な言葉を呟いたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5931v/>

---

大熊猫の日々は波乱万丈です。

2011年11月26日18時45分発行